

第五章 會社の會計

一四〇

昭和三十三年度末現在	内	譯	日本興業銀行外五行	一六、五〇〇、〇〇〇
昭和三十四年度末現在	内	譯	日本興業銀行	一六、五〇〇、〇〇〇
			朝鮮銀行	一〇、〇〇〇、〇〇〇
			日本興業銀行	五、〇〇〇、〇〇〇
			朝鮮銀行	五、〇〇〇、〇〇〇
昭和十五年末現在	内	譯	日本興業銀行外四行	一七、七八〇、〇〇〇
			朝鮮銀行	八、二五〇、〇〇〇
			日本興業銀行外四行	六、二五〇、〇〇〇
			朝鮮銀行	三、二八〇、〇〇〇
			東洋拓植株式會社	三、二八〇、〇〇〇

○滿鮮拓植株式會社の資金

1. 株 金

會社の資本金が壹千五百萬圓、三十萬株、一株金額五十圓、第一回拂込二十五圓（二分の一拂込）、全株に就き七百五十萬圓であり、之が全株鮮滿拓植株式會社の引受であることも既記の通りである。

2. 借 入 金

會社の基幹事業たる開拓事業、即ち開拓民の入植援助或は統制集結、開拓地の買収改

良、開拓民の家屋建築等の事業資金は相當巨額に上り且つ固定するから、株金のみにては到底運轉不可能であり、會社設立の當初より年々鮮滿拓植株式會社その他より借入れて來たのであつて、其の年度別金額は左の通りである。

○各年度末現在借入金

康徳三年十二月三十一日現在	朝鮮總督府 二口	二、七一四、五七八・四〇
	南滿洲鐵道株式會社 五口	一〇八、〇二六・〇三
	東洋拓植株式會社 一口	二、五四四、〇九〇・四六
康徳四年十二月三十一日現在	朝鮮總督府 二口	六二、四六一・九一
	南滿洲鐵道株式會社 三口	八、〇六五、八六三・九〇
	東洋拓植株式會社 一口	一〇八、〇二六・〇三
	朝鮮總督府 二口	一、三七五、六八四・〇〇
	東洋拓植株式會社 一口	三二、一五三・八七
	鮮滿拓植株式會社 一口	六、五五〇、〇〇〇・〇〇
康徳五年十二月三十一日現在	朝鮮總督府 二口	一七、四八三、七一〇・〇〇
	南滿洲鐵道株式會社 三口	一〇八、〇二六・〇三
	東洋拓植株式會社 一口	一、三七五、六八四・〇〇
	鮮滿拓植株式會社 九口	一六、〇〇〇、〇〇〇・〇〇

第五章 會社の會計

一四一

康徳六年十二月三十一日現在

二五、一三三、七二〇・〇三

朝鮮總督府 二口

一〇八、〇二六・〇三

南滿洲鐵道株式會社 三口

一、三七五、六八四・〇〇

鮮滿拓殖株式會社 五口

二一、六五〇、〇〇〇・〇〇

康徳七年十二月三十一日現在

二、〇〇〇、〇〇〇・〇〇

滿洲興業銀行(當座貸越契約)

三二、四一三、七一〇・〇三

朝鮮總督府

一〇八、〇二六・〇三

南滿洲鐵道株式會社

一、三七五、六八四・〇〇

鮮滿拓殖株式會社

二八、九三〇、〇〇〇・〇〇

滿洲興業銀行

二、〇〇〇、〇〇〇・〇〇

二、會社の貸借對照

○鮮滿拓殖株式會社の貸借對照

會社の會計は滿鮮拓殖株式會社の事業の進展と會社独自の事業の進捗とに伴ひ年々膨脹を示しつゝありて、各營業年度別貸借對照表の帳尻を擧げて見れば次の通りである。

(第一)各營業年度末貸借對照尻

昭和十一年度末	資産の部	負債の部
	二〇、一二七、二三・二八	二〇、一二七、二三・二八

同 十二年度末	二八、〇八〇、五二三・九〇	二八、〇八〇、五二三・九〇
同 十三年度末	三六、九二二、〇四二・八四	三六、九二二、〇四二・八四
同 十四年度末	四二、八三六、一八九・八九	四二、八三六、一八九・八九
同 十五年度末	五〇、四四九、三〇二・三五	五〇、四四九、三〇二・三五

次に昭和十五年度末に於ける會社の貸借對照表を掲げて見やう。

(第二)昭和十五年度末の貸借對照表

科 目	資 産 (借 方)	負 債 (貸 方)	
拂込未済資本金	一一、〇〇〇、〇〇〇・〇〇	資 本 金	一一、〇〇〇、〇〇〇・〇〇
營業用土地	六一、五六六・〇〇	法定積立金	一九、五〇〇・〇〇
營業用建物	七一、六一七・八三	社 債	一一、二四〇、〇〇〇・〇〇
樹 木	六四、八二七・三七	借 入 金	一七、七八〇、〇〇〇・〇〇
營業用什器	一一、一九一・一三	當 座 借 越	一四、九〇〇・〇一
動 物	三、二二一・〇三	預り有價證券	一〇、五〇〇・〇〇
貯 藏 品	四〇五・八一	假 受 金	七三、七九九・四五
株 式	七、五〇〇、〇〇〇・〇〇	未 拂 金	一三三、一四四・四五
貸 付 金	二八、九三〇、〇〇〇・〇〇	未 經 過 勘 定	七六、二四〇・〇五
社債發行差金及發行費	一九四、六六四・〇〇	當 期 利 益 金	一、二二八・三九
			一四三

第五章 會社の會計

一四四

滿鮮拓植株式會社勘定	三〇九、九四九・九五	内 當期純益金	八九五・一一
國債	一〇、六四六・〇〇		
現金及預金	四、六二五・三三		
假拂金	一七、四二六・三六		
未收金	一、一九六、六一・五四		
未經過勘定	七、五五〇・〇〇		
合計	五〇、四四九、三〇二・三五	合計	五〇、四四九、三〇二・三五

○滿鮮拓植株式會社の貸借對照

會社の會計も創業以來逐年その事業の進展に伴ひ、地所、造營物、機器、動物、生産物、貸付金、設定費等々の各費目に互り遞増の一途を辿つてゐる。先づ各營業年度末に於ける貸借對照の帳尻を表示すれば左の通りである。

(第一)各營業年度末貸借對照尻

	資 産 の 部	負 債 の 部
康 德 三 年 末	一八、〇六六、八八九・七三	一八、〇六六、八八九・七三
同 四 年 末	二四、四八六、〇〇七・〇三	二四、四八六、〇〇七・〇三
同 五 年 末	三四、二〇六、四一四・三六	三四、二〇六、四一四・三六
同 六 年 末	四二、七五九、六四四・六七	四二、七五九、六四四・六七

同 七 年 末

五六、九四一、一一八・七六

五六、九四一、一一八・七六

次に康德七年十二月三十一日現在の貸借對照表を示せば左の通りである。

(第二)康德七年末の貸借對照表

科 目	資 産 の 部	科 目	負 債 の 部
拂込未済株金	七、五〇〇、〇〇〇・〇〇	株 金	一五、〇〇〇、〇〇〇・〇〇
地 所	二、八〇二、二二二・一七	社員身元保證金	一九一、三九一・六九
造 營 物	二、一〇九、二九二・六八	未 拂 金	五三二、〇一六・八八
樹 木	八、七九八・七六	借 入 金	三三、四一三、七一〇・〇三
機 器	三五八、〇七三・五九	當 座 借 越 金	七、四四一、九五五・九三
動 物	一二三、四二〇・九一	鮮滿拓殖會社勘定	一一九、九四〇・〇六
有 價 證 券	一、七五〇、〇〇〇・〇〇	地所建物讓渡受高	四八七、六五六・五〇
貯 藏 品	一、四二二、〇五四・六九	假 受 金	三〇八、三六二・〇五
現 金	七、五一九・〇八	當 期 純 益 金	二四六、〇八五・六二
貸 付 金	一九、八三四、七六三・三一		
賣 掛 金	一、二四四・五五		
未 收 金	一、二五七、三〇七・九八		
當 座 預 金	一二九、五三三・一一		

農村建設費	一四、九五四、四七六・七一
地所建物讓渡高	三、四七三、四六五・二二
開拓訓練所建設費	九一、〇〇二・八二
假拂金	九二六、二四〇・一九
未經過勘定	一九一、七〇二・九九
合計	五六、九四一、一一八・七六

計 五六、九四一、一一八・七六

三、會社の財産目録

○鮮滿拓殖株式會社の財産目録

會社の財産、即ち會社の資産(借方)と負債(貸方)とを各營業年度末に於ける其の總額に就いて擧げると次の通りである。

(第一)各營業年度末資産負債總額表

	資産 (借方)	負債 (貸方)
昭和十一年度末	二〇、一二七、二二三・二八	二〇、一二七、二二三・二八
同 十二年度末	一五、九七八、二三七・五三	八、〇七四、一二三・九〇
同 十三年度末	二四、九二二、〇四二・八四	一六、七七四、七三七・二二

同 十四年度末	三〇、八三六、一八九・八九	二二、七〇二、六八四・八〇
同 十五年度末	三八、四四九、三〇二・三五	三〇、四二八、五八三・九六

次に昭和十五年度末に於ける財産目録を示せば左の通りである。

(第二)昭和十五年度末財産目録

資産(借方)		負債(貸方)	
科目	金額	科目	金額
營業用土地	六一、五六六・〇〇	社債	一一、二四〇、〇〇〇・〇〇
營業用建物	七一、六一七・八三	借入金	一七、七八〇、〇〇〇・〇〇
樹木	六四、八二七・三七	當座借越	一四、九〇〇・〇一
營業用什器	一一、一九一・一三	預り有價證券	一〇、五〇〇・〇〇
動植物	三、二二一・〇三	假受金	七三、七九九・四五
貯藏品	四〇五・八一	未拂金	二三三、一四四・四五
株式	七、五〇〇、〇〇〇・〇〇	未經過勘定	七六、二四〇・〇五
貸付金	二八、九三〇、〇〇〇・〇〇		
社債發行差金及發行費	一九四、六六四・〇〇		
滿鮮拓殖株式會社勘定	三〇九、九四九・九五		
國債	一〇、六四六・〇〇		

現金及預金	四、六二五・三三
假拂金	一七、四二六・三六
未收金	一、一九六・六一・五四
未經過勘定	七一、五五〇・〇〇
合計	三八、四四九、三〇二・三五

合計 三〇、四二八、五八三・九六

○滿鮮拓植株式會社の財産目録

會社各營業年度末に於ける資産總額及負債總額を表示すれば左の通りである。

(第一)各營業年度末資産及負債總額表

康徳三年度末	資産總額	負債總額
同 四年度末	一八、〇六六、八八九・七三	三、〇一三、〇二二・二二
同 五年度末	一六、九八六、〇〇七・〇三	九、四四三、三〇三・九六
同 六年度末	二六、七〇六、四一四・三六	一八、九七二、一二七・五九
同 七年度末	三五、二五九、六四四・六七	二七、五〇八、九八七・六三
同 七年度末	四九、四四一、一一八・七六	四一、六九五、〇三三・一四

次に康徳七年度末現在に於ける會社の財産目録を示せば次の通りである。

(第二)康徳七年度末財産目録

科目	摘要	金額
地所	新京外宅地 一八、四七一坪五〇一六 三一五、七九八・九九	二、八〇二、二二二・一七
	吳家荒農場外農地 五七、六二五町一四三二、四八六、四二三・一八	
	本社々屋獨身社宅車庫 一八〇四坪二一 五六六、三九六・六九	
	並附屬建物 二二六坪七四 六一、一九五・二一	
	理事公館並附屬建物 二二六坪七四 三九、一六二・七三	
	延吉支店事務所並附屬建物 一八五坪三九二 一一九、一四四・二三	
	延吉支店社宅並附屬建物 五〇四坪二八五 六、六〇八・五二	
	明月溝事務所並附屬建物 二六坪四三 一七〇、四〇五・二九	
	牡丹江支店事務所並附屬建物 四七六坪 二二七、二六五・八七	
造營物	牡丹江支店社宅 一、〇八三平方米七四 五〇、九五〇・〇〇	二、一〇九、二九二・六八
	北安出張所事務所 九二坪二六 二二〇、四四六・一八	
	北安出張所社宅並附屬建物 三九〇坪八五 三五三、〇六〇・三〇	
	奉天支店社宅並附屬建物 九九〇坪六四 三三、七一八・六九	
	奉天市貸家三棟並附屬建物 三五八坪六 四、六三四・四二	
	旺清門精米工場並附屬建物 六四坪 二四六、三〇四・五五	
	通遼農場外土地事務所並附屬建物	

第五章 會社の會計

樹木	通遼農場外樹木	八、七九八・七六	一五〇
機器	本社營業用什器	九一、〇八三・一五	
	同 營業外什器	五、六五七・九七	三五八、〇七三・五九
	新京延吉牡丹江北安奉天各支店出張所並 現地什器	二六一、三三二・四七	
動物	通遼外各牧場牧牛六三九頭	一一三、三五〇・九一	一一三、四二〇・九一
	四道溝兔 二頭	七〇〇〇	
有價證券	滿洲畜産株式會社株式 一五、〇〇〇株五 〇圓拂込	七五〇、〇〇〇〇〇	一、七五〇、〇〇〇〇〇
	滿洲糧穀株式會社株式 二〇、〇〇〇株二 五圓拂込	一、〇〇〇、〇〇〇〇〇	
貯藏品	用紙外貯藏品代		一、四二二、〇五四・六九
現金	手許有高	三七一、八九八・七四	七、五一九・〇八
	安全農村貸付金	一三、六〇六、九一八・四三	
貸付金	集團集合及農場貸付金	六一〇、九一四・三五	一九、八三四、七六三・三一
	其他貸付金	五、二四五、〇三一・七九	
	自作農創定貸付金		一、二四四・五五
賣掛金	白米賣却代金	一九七、二二三・〇一	
	小作料	九七一、六一五・三二	一、二五七、三〇七・九八
未收金	貸付金及分讓利息	八八、四五九・六五	
	其他		

當座預金	滿洲中央銀行外	一一、七五三、三三四・三二	一二九、五三三・一一
農村建設費	各土地建設費	七七五、七四三・〇六	二四、九五四、四七六・七一
	榮興農村	四九六、四九四・七五	
	河東農村	二七七、一五三・九一	三、四七三、四六五・二二
地所建物讓渡	興和農村	一〇三、〇八二・七二	
	鐵嶺農村	六七、六五六・四六	
	三源浦農村		
	河東警察分署		
開拓訓練所建設費	江密峰開拓訓練所	一四七、八四五・五四	九一、〇〇二・八二
	土地買收關係	一八六、六一三・八〇	
	土地改良工事關係	九一、五五五・八六	
假拂金	造營物關係	二四七、五五七・二四	九二六、二四〇・一九
	貸付金關係	一三一、八七四・三三	
	現場資金	一一〇、七九三・四二	
	諸口	九〇、五〇〇・六五	
未經過勘定	借入金利息	七、一五八・八九	一九一、七〇二・九九
	火災保險料	九四、〇四三・四五	四九、四四一、一一八・七六
	家賃外		
合計			一五一

負債之部

科目	摘要	金額
借入金	鮮滿拓殖株式會社	二八、九三〇、〇〇〇・〇〇
	滿洲興業銀行	二、〇〇〇、〇〇〇・〇〇
	南滿洲鐵道株式會社	一、三七五、六八四・〇〇
	朝鮮總督府	一〇八、〇二六・〇三
	前田道寬外	
社員身元保證金	借入金利息	四三、一一八・七六
	納品代	一二六、五九二・四三
	工事費	二一九、一六七・六一
	税金公課	七七、五六二・九二
	身元保證金利息	六、一二九・二七
	諸口	五九、四四五・八九
未拂金		
當座借越金	滿洲興業銀行	三、九一八、一〇三・四一
	滿洲中央銀行	三、五二二、八五二・五二
鮮滿拓殖會社勘定	河東農村	九六、六〇二・二〇
	興和農村	九九、九五二・七二
		七、四四一、九五五・九三
		一一九、九四〇・〇六

地所建物讓渡受高	榮興農村	一五〇、七一七・四五	四八七、六五六・五〇
	鐵嶺農村	一〇八、〇〇四・五〇	
	三源浦農村	二二二、一四三・七六	
	河東警察分署	九、二三五・八七	
假受金	工事手直保留金外預り金	四二六、二九四・四九	
	貸付金回收引當	三一、七八〇・二四	五〇八、三六二・〇五
	配給品歩増整理金外	五〇、二八七・三二	
合計		四一、六九五、〇三三・一四	

四、會社の損益計算

○鮮滿拓殖株式會社の損益計算

會社の各營業年度末に於ける會計上の損益總計算數字を表示すれば左の通りである。

(第一)各營業年度末損益總額表

年度	利益總額	損失總額	差引純益金
昭和十一年度末	二五四、一三七・七四	一二七、〇一四・四六	一二七、一一三・二八
同 十二年度末	六一四、〇七六・四六	二九三、七五三・一八	三二〇、三二三・二八
第五章 會社の會計			一五三

同 十三年度末	一、一七七、一六八・〇五	八四九、七四四・七七	三二七、四二三・二八
同 十四年度末	一、二四四、一八〇・六六	一、一二四、四九八・八五	一一九、六八一・八一
同 十五年度末	一、四三五、九七五・〇〇	一、四三五、〇七九・八九	八九五・一一

一五四

次に昭和十五年度末に於ける會計の損益計算を擧ぐれば左の通りである。

(第二)昭和十五年度末損益計算

利 益		損 失	
科 目	金 額	科 目	金 額
貸付金利息	一、一七二、一三六・〇〇	借入金利息	一、〇八三、五一九・六五
受入雑利息	五、九一五・三七	有價証券借入料	二二五・一八
株式配當金	二四六、〇八五・六二	支拂手数料	一、一八三・二六
拓殖訓練所收入	三三九・〇〇	本社費	二二四、三五四・四〇
受入手數料	九・八〇	拓殖訓練所費	一〇、一一二・〇八
雜益	一一、四九九・二一	西北鮮開拓事業費	四、一四二・五一
		地北鮮開拓事業費	四、〇四〇・〇二
		營業用建物什器却却	二、三、四一〇・〇〇
		社債發行差銷金	九四、一〇二・七九
		發行費	一、四三五、〇七九・八九
		雜損	
計	一、四三五、九七五・〇〇	計	

前期繰越金

三三三・二八

当期利益金

一、二一八・三九

合 計

一、四三六、二九八・二八

内当期純益金

八九五・一一

○滿鮮拓植株式會社の損益計算

會社の各營業年度末に於ける會計上の損益總計算數字を表示すれば左の通りであつて

矢張り大體遞増の一途を辿つてゐる。

(第一)各營業年度末損益總額表

年 度	總 益 金	總 損 金	差 引 純 益 金
康 德 三 年 末	八〇八、四七五・九二	七五四、六〇八・四一	五三、八六七・五一
同 四 年 末	一、九一九、三五八・八六	一、八七六、六五五・七九	四二、七〇三・〇七
同 五 年 末	二、九六一、二〇二・九一	二、七二六、九一六・一四	二三四、二八六・七七
同 六 年 末	五、一八三、八九八・〇六	四、九三三、二四一・〇二	二五〇、六五七・〇四
同 七 年 末	四、七九一、四五八・二六	四、五四五、三七二・六四	二四六、〇八五・六二

次に康德七年十二月三十一日現在に於ける損益計算を科目別に表示すれば次の通りである。

(第二)康徳七年度末損益計算

益金の部		損金の部	
科	目	科	目
開拓地	収入	開拓地	経費
農地	収入	農地	経費
安全農村	収入	安全農村	経費
開拓訓練所	収入	開拓訓練所	経費
精米	収入	總係	経費
總係	収入	利息	支出
牧場	収入	雜支	支出
		牧場	経費
		精米	経費
合	計	合	計
当期純益金	四、七九一、四五八・二六		四、五四五、三七二・六四
	二四六、〇八五・六二		

五、會社の利益金處分

○鮮滿拓殖株式會社の利益金處分

會社の各營業年度に於ける利益金處分は左の通りである。

○各營業年度利益金處分

昭和十一年度	純益金	處分	金額
昭和十一年度	一一七、一一三・二八	法定積立金	六、四〇〇・〇〇
		株主配當金	一一〇、四〇〇・〇〇 (一株に付三〇錢)
		後期繰越金	三三三・二八
同 十二年度	三三〇、三三三・二八	法定積立金	三三〇、〇〇〇・〇〇 (一株に付八〇錢)
		株主配當金	三三三・二八
		後期繰越金	三三三・二八
同 十三年度	三二七、四二三・二八	法定積立金	七、一〇〇・〇〇
		株主配當金	三三〇、〇〇〇・〇〇 (一株に付八〇錢)
		後期繰越金	三三三・二八
同 十四年度	四八六、三二三・二八	法定積立金	六、〇〇〇・〇〇
		株主配當金	四八〇、〇〇〇・〇〇 (一株に付四二〇)
		後期繰越金	三三三・二八
同 十五年度	四八〇、四二三・二八	法定積立金	一〇〇・〇〇
		株主配當金	四八〇、〇〇〇・〇〇 (一株に付四二〇)
		後期繰越金	三三三・二八

因に右昭和十五年度の純益金四八〇、四二三・二八圓の内譯は左の通りである。

八九五・一一	當期純益金
三二三・二八	前期繰越金
四七九、二〇四・八九	政府補給金

○滿鮮拓植株式會社の利益金處分

會社の利益金處分に關し各營業年度別に示せば左の通りである。

○各營業年度別利益金處分

康徳三年度	純益金	處分	金額
同 四年度	四二、七〇三・〇七	社員退職給與積立	五、〇〇〇・〇〇
同 五年度	二三四、二八六・七七	株主配當金	四八、八六七・五一
同 六年度	二五〇、六五七・〇四	株主配當金	四二、七〇三・〇七
同 七年度	二四六、〇八五・六二	株主配當金	二三四、二八六・七七
		株主配當金	二五〇、六五七・〇四
		株主配當金	二四六、〇八五・六二

第六章 會社の開拓民部落經營要領

以上にて滿洲開拓鮮農に對する助成機關鮮滿、滿鮮兩拓植會社の業績概要を敘へ盡したから、爰に更めて會社の滿洲開拓鮮農部落經營の要領を掲げて見やう。

一、經營の方法及組織

開拓民部落の經營は關東軍及滿洲國指導援助の下に滿鮮拓植株式會社が主體となり左記の要領に基いて經營する。

1. 經營の方法

開拓民部落の建設中、即ち土地の買収之が改良工事、開拓民の收容等入植を完了する迄の管理は會社に於て之を行ひ、所要經費は建設費に繰入れることとし、農耕地の開墾及家屋の建築は主として入植後開拓民に之を行はしめ、必要に應じ會社が之を代行する。

但し建設費に對する金利は年利一割以内とする。

2. 建設完了後の管理組織

建設完了後は各開拓民部落毎に農務稷を設け、必要に應じ農務稷聯合會を組織せしめ、會社駐在員の指導の下に開拓民部落の管理を爲さしめる。

(イ) 教化輔導機關

會社は適宜開拓民部落に駐在員を置き、農務稷聯合會又は農務稷を輔導して開拓民の教化、福利増進を圖り、併せて土地代年賦償還金の徵集を監督せしめる。

(ロ) 農務稷聯合會

農務稷聯合會の區域は成る可く滿洲國街村制に合致せしめ、教育衛生其他街村辦理事項以外の共同處理を要すべき事項一切を取扱はしめ、之が輔導は専ら會社に於て之を行ふ。

二、自作農創定

1. 年賦讓渡の開始時期

開拓農地の經營は原則として自作農創定の方針を採り、農耕に着手し收穫を擧げ得

るに至つた年より實狀に應じ適度の償還を開始すること。

2. 年賦讓渡代金の利率

年賦讓渡代金の利率は會社創立當初の計畫に基き年利一割以内とする。

3. 土地讓渡契約の當事者

土地讓渡契約の當事者は開拓民各個とし、各部落毎に部落民相互の連帶保證を以て償還の責に任じ、之が取立に付ては全部落民の共同團體たる農務稷聯合會又は農務稷をして協力せしめる。

4. 讓渡代金額

年賦讓渡すべき金額は各開拓民部落の建設費總額に對し現地の實情に即應して適當なる等級を附したる割當面積に割掛け、殘餘の荒地沼澤地等は當該農務稷聯合會又は農務稷の總有とし、其の利用収益は之が財源に充當する。

5. 償還年限及權利の讓渡

償還年限は二十箇年以内とし、土地收益及副業收入より農務稷費、教育費、農耕費、生計費、自警費等を控除した殘額を以て償還し得るやう年限を定め、償還完了と同

時に所有權を讓渡する。

但し契約期間内と雖も繰上償還を希望する者に對しては之を承認し得る。

6. 契約土地の權利關係

年賦償還完了前に於ける契約上の權利義務は會社の承認を得るに非ざれば讓渡することが出來ぬ。

三、開拓民の金融

開拓民の金融は會社に於て取扱ひ、圓滑なる經濟の發達を圖ることとし、其の金利は會社創立當初の計畫に基き移住費、家屋建築費、開墾費及農具耕牛費等の短期年賦償還貸付金は年利一割以内とし、一般營農費貸付金は年利一割五分以内とする。

四、開拓民部落經營費の負擔

建設に要して經費は一切之を建設費に繰入れて開拓鮮農の負擔とし、年賦償還せしめることになつてゐる。

五、警備施設

開拓民部落の治安維持を圖り、開拓民をして生業に安んぜしむる爲め、開拓民部落の實狀に由り自衛團を組織する外、關東軍及滿洲國の指導援助を受ける。

(備考) 開拓民の收容地、收容戸數、營農條件及移住心得等は豫め關東軍、滿洲國及朝鮮總督府と協定し、且つ廣く開拓民に周知せしめ、之を適宜輔導して統制の目的及移住計畫の實行に違算ならしめる。

第七章 開拓鮮農への補助金

一、満鮮兩當局の協議

満洲に入植の開拓鮮農に對する取扱が逐年改善向上し來れることは次章に詳説するが、昨年満洲開拓政策要綱確定の結果、日本内地より入植の開拓農民に準じて之を取扱ふこととなりたるに鑑み、開拓總局にては矢張り昨年十月招墾處長、經理科長及第二指導科長等の赴城を見て、朝鮮總督府外事部長、拓務課長等との間に、開拓鮮農に對する補助金支出分擔を始め學校、衛生施設其他必要なる關係事項に關して隔意なき協議を遂げた。

二、日滿補助負擔の決定

開拓鮮農に對する上記日滿兩國政府の負擔すべき補助金額は左記の如くに決定を見た。

1. 集團開拓鮮農に對する補助金(三〇〇戸)

集團開拓鮮農に對する補助金の内譯及其の總額は次の如くなる計算である。

○建設五箇年間に於ける集團開拓民(朝鮮人
三〇〇戸)に對する日滿兩國政府補助金負擔額

項	目	日本側	滿洲側	計	備考
(イ)	個別補助	四八、〇〇〇	—	四八、〇〇〇	
(ロ)	共同補助	二四、四九二・五	二四、四九二・五	四八、九八五	日滿折半
(ハ)	満洲に於ける施設補助	—	二五、九二五	二五、九二五	
(ニ)	其他の政府負擔	一五、一七五	二一、一七五	三六、三五〇	
内	銃器及彈藥	—	六、〇〇〇	六、〇〇〇	
内	譯指導員人件費	一五、一七五	一五、一七五	三〇、三五〇	日滿折半
計		八七、六六七・五	七一、五九二・五	一五九、二六〇	
右	一戸當	二九二	二三八	五三〇	

2. 集合開拓鮮農に對する補助金(五〇戸)

集合開拓鮮農に對する日滿兩國政府の補助金負擔額は次の如くなる。

○建設五箇年に於ける集合開拓民（朝鮮人五〇戸）に對する日滿兩政府補助金負擔額

項	日本側	滿洲側	計	備考
(イ) 個別補助	七、〇〇〇	—	七、〇〇〇	
(ロ) 共同補助	三、八四七	三、八四七	七、六九四	日滿折半
(ハ) 滿洲に於ける施設補助	—	四、二七五	四、二七三	
(ニ) 其他政府の負擔	三、〇七〇	三、七九〇	六、八六〇	
内 銃器及彈藥	—	七二〇	七二〇	
内 譯 指導員人件費	三、〇七〇	三〇七	六、一四〇	日滿折半
計	一三、九一七	一一、九二二	二五、八二九	
右 一 戸 當	二七八	二三八	五二二	

3. 分散開拓鮮農に對する日滿兩政府の補助金負擔額（四〇〇戸）

項	日本側	滿洲側	計
個別補助	二四、〇〇〇	—	二四、〇〇〇
計	二四、〇〇〇	—	二四、〇〇〇
右 一 戸 當	六〇	—	六〇

第八章 滿洲國政府の對鮮農政策

次に開拓鮮農收受國たる滿洲國政府の朝鮮人に對する指導政策の概要及び之が變革の跡を考察して見やう。

一、滿洲國政府の在滿鮮人に對する指導要綱

滿洲國政府の在滿朝鮮人指導要綱は、康德三年八月、即ち上記の兩拓植助成會社の設立に先立つて確立されてゐたのであつて、之を要約すれば

「在滿鮮人を滿洲國構成の重要分子と見做し、之を統制撫育すると共に、他民族と協和融合して以て滿洲國の興隆伸展に寄與せしめんとする」

と云ふにあり、従つて他民族と均等の條件を以て、集團部落の治安維持にも任せしめ、或は一般官公吏にも採用する等各方面に堅實なる向上發展を遂げしめんとしてゐる。

現に新規入植の各集團開拓部落に在つても地方軍警の指導下に立派に治安維持の責に任じてゐるは勿論、康德六年春には間島省に半島出身特設部隊の編成が認められて相當

な成績を挙げつゝある。又滿洲國政府の官吏に任用されてゐる朝鮮人も簡任官五名、薦任官六十數名、委任官に至つては三、四百名にも達してゐる。

但し、朝鮮人の新規入植及在滿鮮人の統制集結に關しては、當初若干の制限乃至取扱特例が認められてゐた。即ち「鮮農取扱要領」、「鮮農移住統制並安定實施要綱」及「同細目」等によつて大要次の如き内規が定められてゐた。

○鮮農移住に對する取扱要領

1. 新規入植戸數は毎年一萬戸以内とすること
2. 新規入植地域は間島省及舊東邊道の二十三縣下に限ること
3. 國境地帯の鮮農は指定箇所に移住せしめること

二、第一次の修正

由來開拓政策なるものは、開拓民送出國の側及び開拓民收受國の側にとつて、決して一定不變のものではなく、環境なり時勢なりの推移に由つて、當然幾度でも如何様にも修正改訂せらるべきである。英、獨、伊等諸外國の例に見るまでもなく、近く日本の北海

道に對する植民政策に就て見るも、明治初年開拓使の移民政策から始まつて、同二年十一月には早くも別の移民規則が設けられ、更に同三年、同五年、同七年と殊に其の當初に於ては殆ど各年乃至隔年に政策の變更修正を閲して來てゐる。

滿洲國政府の對鮮農開拓政策にあつても御多分に漏れず翌康德四年中に於て既に或る程度の變更改訂を見た。

即ち國境地帯に既往の鮮農に對しても、決して之を強制的に移住せしむるが如き態度には出でず、特殊の必要を認めざる限り寧ろ概ね原地に於て安定せしめるといふ緩和的措置に變つて來た。

更に既往鮮人の統制集結に就ても、當初尙ほ確たる地域的の決定を見てゐなかつたが、同四年中に左記各省の十六縣が指定縣として明示せられた。

奉 天 省—開原、鐵嶺、西安、西豐の四縣

吉 林 省—永吉、額穆、敦化、雙陽、懷德、舒蘭、樺甸の七縣

牡丹江省—寧安の一縣

龍 江 省—泰東、洮南の二縣

濱江省—綏化の一縣
興安南省—通遼の一縣

三、第二次の改善

朝鮮開拓民に對する滿洲國政府の指導要綱は、康德五年に入りて再び相當重要な改訂を見た。即ち開拓民取扱事項を協議決定する爲に設置されてゐる「開拓民事務處理委員會」は同年七月二十五日開會、過去一箇年半に亘る鮮農開拓民入植の實績に鑑みて慎重審議の結果、鮮農取扱要綱の方針十二項を決定したが、其の主なる改訂箇條は次の數項に盡きる。

1. 新規入植戸數は差當り毎年一萬戸とすること(從來よりも積極的)
2. 新規の移住希望者に對し朝鮮總督府は、移住地域別に入植者を決定して之に移住證明書を發給すること
3. 滿洲國政府は入滿鮮農の統制並に補導の爲、鮮滿國境の必要なる箇所には拓政辦事處を設置すること(此項も遂に進取的)

4. 新規入植者は土地の情況其他の事情の許す限り、別に定むる地域に集團入植せしめ若くは一般的に適宜の方法に依り集合又は分散入植せしむること(開拓民形態の種別は集團、集合及分散の三種となる)
5. 開拓民の選定に當りては其の素質に重點を置き、入滿後滿洲國の構成分子として遺憾なきを期すると共に、必要に應じ鮮滿双方に於て訓練を實施すること
6. 新規入植地域は國境地帯其他特に定むる地域以外とすること
(從來入植、集結地域として指定せられてゐた制限を原則的に撤廢した譯である)
7. 新規入植者の土地の選定及之が入植に就ては、地方行政機關、鮮拓、金融會其他の關係機關が協力し、必要に應じ其の指導援助を爲すこと(更めて之を明示した)
尙ほ集團入植用地の整備要領は内地人用地の場合に準ずること
即ち之を要約すれば、毎年一萬戸の入植を勵行すること及び入植地域に關する制限を原則として撤廢し、内地人開拓民入植の場合と同様全滿を通じて何れの地方にも入植し得ることとなつたのであるから、鮮農に取つては取扱上の一大飛躍的向上と言ふことが出來やう。唯だ國防乃至治安其他の特殊事情の爲め例外地域の定められてゐることは、

内鮮開拓民に共通にして當然の制限と解さなければならぬ。

四、滿洲開拓政策基本要綱の決定

滿洲の開拓事業は大體軌道に乗つてから既に數年を閲みしたる上、現下日滿兩國の當面せる新東亞建設と云ふ大使命に對處する爲めには、新事態に即應した開拓政策の確立を見るの必要に迫られて來た。

仍ち當の滿洲國にては康徳六年一月上旬大掛りな日滿共同拓植懇談會を開催、兩國政府關係當局及専門家數十名の參集を見て、滿洲國側の所謂滿洲開拓政策要綱素案なるもの、提示となり、日本側にては之を對象として滿洲開拓政策樹立準備委員會に引續き、臨時滿洲開拓民審議會を設置して關係官廳及民間諸權威の綜合參劃を求め、官民一致協力の下に審議檢討を加へること數箇月、一昨年十二月に入りて漸く結論に到達、同月二十二日、日滿兩國政府より同時に之を發表したのである。

上記の經過によつて纏つた滿洲開拓政策基本要綱なるものは、開拓に關する諸般の事項二十六項に亘つてゐるが、その内特に鮮人開拓民に關係する條項のみを掲げて見れば

左の通りである。

- (1) 朝鮮人開拓民は開拓農民に重點を置き、差當り現在の實施計畫に依り移住せしめ將來之が數的擴充を期するものとす。
- (2) 集合開拓民の數は集團開拓民の數と併せ考慮するものとし、差當り新規移住戸數の過半たらしむる様努むるものとす。
- (3) 移住要領は集團開拓民に在りては概ね日本内地人集團開拓民の例に準じ、夫々現地の實慣に應じ精粗その宜しきに從ひ、速に自立し得る如く指導するものとす。尙必要に應じ先遣隊制度を實施す。
- (4) 集團及集合開拓地の行政經濟機構は原則として滿洲國制度に融合歸一せしむるも、移住後當分の間は開拓民の形態及開拓地の實情等に應じ街村制及經濟協同機構の運用につき適宜の考慮を加へ輔導安定に遺憾なからしむるものとす。
- (5) 朝鮮人開拓民の訓練は開拓民幹部、基幹開拓民、一般開拓民、中堅青年開拓民等に對し夫々の目的に應じ、朝鮮に在りては朝鮮總督その他關係機關、滿洲國に在りては當該開拓關係機關之に當るものとし、其の訓練につき密接なる連繫を保持す

るの措置を講ずるものとす。

(6) 滿洲拓植公社と滿鮮拓植株式會社との統合に伴ひ、滿洲拓植公社の支社又は出張所を京城に置く。

(7) 朝鮮人開拓民に對する助成に關しては原則として日本内地人集團及集合開拓民に對する助成に準ずべきも、其の特殊性に鑑み適當に考慮す。

(8) 朝鮮人開拓民子弟の教育に就ては特に措置すべき事項概ね左の通りとす。

(イ) 學校經營に關しては集團開拓地及集合開拓地に在りては學校組合を設けず、新學制の定むる處に従ひ地方團體をして經營せしめ、教育費は滿洲國及朝鮮總督府に於て別に協議する處により負擔するものとす。

(註) 此項の協議の結果は既記會社の事業(第四章)中9の(イ)の項に述べて置いたから之を略く。

(ロ) 分散開拓地に於ては一般朝鮮人教育の例に依る。尙ほ滿鮮共學を必要とするときは經營、職員、組織等に付適宜措置す。

(9) 既往朝鮮人農民の安定輔導に關する件

(イ) 既往朝鮮人農民中安定せざる者に對しては物心兩方面より極力之を安定々着

せしむる如く輔導し、以て健全なる滿洲國構成分子たらしむるものとす。

(ロ) 協和會運動の強化に依り極力精神的安定方を講ずると共に自力更生計畫を樹立して營農の全理化を圖り農家經濟を充實せしむるものとし、之が爲指導者の養成及訓練を爲すものとす。

(ハ) 耕作地を確保せしむる爲自作農創定又は小作權の移動防止等有效適切なる方法を講ずると共に榜青制度を嚴に禁止するものとす。

(ニ) 既往朝鮮人農民安定の爲必要なる金融に就ては適當の方途を講ずるものとす。即ち滿洲に於ける朝鮮人開拓民の地歩は、數の點に於ても、取扱の點に於ても將た助成の點に於ても共に原則として日本内地人開拓民に準ずると云ふのであるから實に劃期的な躍進と解さなくてはならぬ。

(10) 開拓事業の經費負擔

尙ほ右滿洲開拓政策基本要綱中には、日本内地人集團、集合、分散三形態開拓民に對する助成として、日滿兩國政府の負擔すべき經費の分擔が左の如く規定せられありて而も朝鮮人開拓民に對する助成に關しては既記の如く「原則として此の日本内地人の

例に準ずるも其の特殊性に鑑み適當に考慮するものとす」とある。

(甲) 集團拓民に對する助成

イ 個別補助(日本政府負擔)

(イ) 渡航費補助 全額

(ロ) 個人施設費補助 初年度建設費の概ね三分の一

ロ 共同補助(日滿兩國政府同額負擔)

(イ) 團本部補助 初年度建設費の全額

(ロ) 共同産業施設費補助 初年度建設費の半額

(ハ) 醫療施設費補助 初年度建設費及維持費(五年間)の全額

(ニ) 地區内道路及電話費補助 初年度建設費の半額

ハ 滿洲國內に於ける施設及助成(滿洲國政府負擔)

(イ) 地區外道路費 初年度建設費の全部及維持費の一部

(ロ) 地區外警備電話架設費 全額

(ハ) 滿洲國內に於ける施設及助成

(乙) 集合開拓民に對する助成

イ 個別補助(日本政府負擔)

(イ) 渡航費補助 全額

(ロ) 個人施設費補助 初年度建設費の概ね三分の一

ロ 共同補助(日滿兩國政府同額負擔)

(イ) 部落事務所補助 初年度建設費の全額

(ロ) 共同施設費補助 初年度建設費の半額

(ハ) 地區内道路費補助 初年度建設費の半額

ハ 滿洲國內に於ける施設及助成(滿洲國政府負擔)

(丙) 分散開拓民に對する助成

イ 個別補助(日本政府負擔)

(イ) 渡航費補助 全額

(ロ) 個人施設費補助 初年度建設費の概ね三分の一

ロ 滿洲國內に於ける施設及助成(滿洲國政府負擔)

五、滿洲拓植公社との統合経緯

1. 總裁の更任

滿洲拓植公社と滿鮮拓植株式會社との統合問題は、既記の如く一昨年十二月二十二日を以て正式に決定、日滿兩國政府より發表の滿洲開拓政策基本要綱中に明示せられた通りであるが、之より先滿洲國側にては、一昨年十一月二日滿洲拓植委員會に於て「滿鮮拓植統合準備委員會」なるものを設置して、統合關係各般事項の審議を續けたるも、未だ何等具體的の決定を見るに至らざる間に、上記の如く兩社統合の件をも含む基本要綱の決定を見、之が具現の一前提として康徳七年六月四日には滿鮮拓植株式會社理事長二宮治重氏が、一旦同理事長を辭任して、新たに滿洲拓植公社總裁に任命せられ、同日再び滿鮮拓植株式會社理事長に任ぜられた。而して前滿拓總裁坪上氏は參議に轉出せられたのである。

2. 準備委員會

仍て新滿拓總裁及新滿鮮拓理事長は、同月二十九日滿拓より五名、滿鮮拓より四名計

九名の委員を任命し、更めて「滿鮮拓統合準備委員會」を設置して以て、兩社統合に必要な諸般の事項を審議せしめた。同準備委員會は爾來前後八回に互る會議を重ねて慎重審議の結果九月中に左記の各項に關する一應の成案を得た。

- (1) 統合の形式、資金及契約書に關する件
- (2) 滿鮮拓植株式會社の負債の處理及鮮滿拓殖株式會社の處理に關する件
- (3) 定款改正に關する件
- (4) 機構に關する件

3. 幹事會の検討及隨員會の通過

乃ち右準備委員會案は次の幹事會に附議せられることとなつた。幹事會は十月初に設けられた處の矢張り統合準備に關する臨時的一機關であつて、高倉招舉處長を會長とし、開拓總局、朝鮮課、拓植委員會、滿拓、滿鮮拓より各一名を幹事として擧げられてゐる。同幹事會は爾來前後四回の會議を重ねて、上記の準備委員會案に再検討を加へ、十一月九日に至り同案は幹事會を通過すると共に滿洲拓植委員會の隨員會をも同時に通過した。

4. 統合委員會にて現地案決定

爰に於て滿洲國政府は同十一月九日愈々左記の統合委員を任命して以て現地側としての最後案を審議せしめることゝなつた。

委員 長	關 東 軍 參 謀 長	木村兵太郎
委 員	開 拓 總 局 長	稻垣征夫
同	滿 拓 總 裁	二宮治重
同	滿 鮮 拓 理 事 長	二宮治重
同	滿洲拓植委員會事務局長	山口乾治
同	大使館朝鮮課長	森 長 文
同	滿 拓 理 事	生駒高常
同	滿 鮮 拓 理 事	堤 永 市

同統合委員會は現地側としての最終的審議機關であるから、既成の原案に對し更に周到綿密な検討を加へ、十一月中を以て滿洲國としての現地案を完成して、十二月初之を日本政府に送附した。

5. 日本側の審議

昨年十二月滿洲拓植公社との統合に關する滿洲國側原地案の送附を受けた日本政府にては、其後直に東上せる山口拓植委員會事務局長並に續いて東上せる武部總務長官より委細の説明を聴取して、日本側としての審議を開始し、本年二月末對滿事務局事務官會議に於て先づ統合實施に關する方針の決定を見たるを以て、三月四日滿洲拓植委員會にては統合準備委員會を開催。

山口拓植委員會事務局長、花輪大使館參事官、森同朝鮮課長、青木企畫處長、滿拓及滿鮮拓各理事、高倉招擧處長以下幹事約十五名出席、意見交換の結果、滿洲拓植公社をして滿鮮拓植株式會社の事業及財産の全部を買收せしむることゝし、之が買收額に就ては近く評價委員會を設置、買收資金は滿洲拓植公社の増資に依るものとしてその増資額を一千五百萬圓、日滿兩國政府折半出資、昭和十六年に半額、同十七年度に残り殘額を拂込み、日本政府分擔額七百五十萬圓は朝鮮總督府の所屬とするが、鮮滿拓殖株式會社の社債(第一回、第二回と併せ額面二千四百萬圓)及借入金四千萬圓は滿洲拓植公社に於て肩替りすることに意見の一致を見た。

6. 評價準備委員會

而して右評價委員の任命に先だち、日滿兩國側より同評價準備委員を擧げて、爾來既に數回の同評價準備委員會を開催着々と必要なる事務的準備を進めた。

7. 人事の交流

尙ほ之より先、滿拓公社と滿鮮拓との間には、實際事務上の便宜に資する爲、前記總裁の更任以來逐次幾多の人事交流を見た。

即ち康徳七年九月四日總裁の滿拓公社總裁任命と同時に滿鮮拓より秘書一名を簡拔し續いて監察員、監察役附、需品部購買課長、土地事務所長、監察役及技師等を順次滿鮮拓より滿拓公社に轉補すると共に、一方滿拓公社の地方事務所長を滿鮮拓の支店長に任命する外、經理課主計主任を兩社相互に他の囑託として交換し合ひ、同事務の交互知悉に便せしめて來たが、更に康徳八年三月に入りては滿鮮拓の企畫課長以下土木關係の技師六名、技手、事務員等約百二十名が、滿拓公社の囑託として發令された。

但し、右土木關係の囑託は依然滿鮮拓の社員であつて、實際の事業も原則として滿鮮拓從來の事業地の事業を遂行する建前ではあるが、何れは極めて近き將來に統合される

のであるから、自ら其處に隨時隨所の技術的乃至勞力的の交流が行はれてゐる。

8. 統合の假調印

斯くて滿鮮拓植株式會社を統合買収すべき滿洲拓植公社にては、四月一日之に即應すべき現地重點主義に基く機構の大改革を斷行すると共に、同日公社會議室に於て、滿洲拓植公社二宮總裁と滿鮮拓植株式會社理事長代理堤理事との間に、右統合に關する假調印を了した。

9. 評價委員會の設置

滿洲拓植公社に讓渡すべき滿鮮拓植株式會社の財産及事業に對する評價委員は四月一日、日滿鮮より左の如く任命せられ。

日本側…山口拓植委員會事務局長、富田前滿洲興銀總裁

滿洲側…稻垣開拓總局長、小平合作社理事長

朝鮮側…諏訪總督府外務部長、有賀貴族院議員

而して、四月七、八の兩日、日滿軍人會館に於て第一回評價委員會を開催、評價方針を決定、滿鮮拓植株式會社の堤理事より書類による説明を聴取の上、同九日より二十一

日までの十三日間滿拓、鮮拓兩會社の南北滿洲に於ける各事業地を視察、再び新京に歸來して同二十二日第二回評價委員會を開會、事業地視察に基き慎重審議の結果、滿鮮拓植株式會社の評價格を七百五十三萬圓と正式に決定、此旨を日滿兩國政府に報告して其の任務を完了、爰に評價委員會は解散せられた。

10. 正式統合調印

上記の如き経過を辿り滿拓と滿鮮拓との統合準備を完了し、日滿兩國政府へ之が實施方針の認可手續を申請中の處、滿洲國側にては五月三日參議府會議にて一切を正式承認せられた。

仍て滿鮮拓にては同二十三日、滿拓にては同二十八日夫々最後の株主總會を開催、左記の統合處理要綱を上程可決の上、愈々六月一日を以て歴史的の兩拓正式統合買収契約調印式を舉行した。

○ 統合處理要綱

滿洲開拓政策基本要綱に基き滿洲拓植公社と滿鮮拓植株式會社とを綜合し以て開拓事業の一元化をはかり開拓地の建設及經營並にこれに關聯する原住民の輔導に關し各民族

に對する治政に當らしめ開拓政策の統制的遂行と民族協和の積極達成に寄與せしむる

- 一、滿洲拓植公社をして滿鮮拓植株式會社の全部を買収せしめこれを解散せしめる
- 一、買收價格は別に設くる評價委員會の決定による
- 一、買收資金は滿洲拓植公社の増資を以て之に充てその増資額を一千五百萬圓とする
- 一、増資金は日滿兩國政府の折半出資とし本年四月一日より明年三月末日迄の間に其半額を拂込み、九年四月以降に残りの半額を拂込むものとする
- 一、日本政府の分擔出資分七百五十萬圓は朝鮮總督府特別會計所屬とする
- 一、滿鮮拓植株式會社の借入金に就て同社の社債によるものはそれを滿洲拓植公社に繼承せしめ日滿兩國政府に於て保證する、其他の借入金に就ても能ふ限り滿洲拓植公社の社債に振替へしめる
- 一、滿鮮拓植株式會社解散後もその株主たる鮮銀、東拓等關係機關をして新に朝鮮人の開拓事業の助成を行はしめることとなるべき滿洲拓植公社のためその資金調査に引續き盡力せしめる
- 一、滿鮮拓植株式會社の營業讓渡より得たる資金は當面する八年度發行の滿洲拓植公社

の社債引受金に可及的充當せしめる

六、鮮滿拓、滿鮮拓の發展的解消

之より先、鮮滿拓殖株式會社は、其の事業投資及財産を昨年末に於て百二十萬圓と評價、本年一月一日之を東洋拓殖株式會社に譲渡の契約調印せられ、實際の取引は同三月三十一日に實施せられたが、實際上の解散は六月十日京城の本社に最後の臨時株主總會を開會して同時に解散式を舉げた。

また滿鮮拓殖會社は既記の如き経緯を辿りて滿拓公社との統合に由り、創立以來滿四年九箇月の赫々たる業績を遺して爰に名實共に發展的解消を遂げたのである。

七、統合後に於ける滿鮮拓の事業及朝鮮人開拓民

統合後に於ける滿鮮拓殖株式會社の機構及事業が其儘全部新滿拓公社に融合繼承せらるべきは勿論であり、既入植及今後入植の朝鮮人開拓民も原則として日本内地人に準じて矢張り新滿拓公社に依りて取扱はるべく、機構上に於ける區別として強いて擧ぐれば、

新滿拓公社の開拓部經營課中に第二經營係及同部金融課中に第二金融係として鮮人開拓民の爲の特別の二係が設けられてゐる外は、全部日本内地人開拓民と同一に取扱はれる譯であるから、鮮人開拓民の地位は統合に因りて飛躍的の向上を見たものと解すべきである。

八、開拓團法の適用

滿洲國政府は康德七年五月三日勅令第百七號を以て、全文三十四ヶ條より成る開拓團法を公布し、公布と同時に之を實施して、其の第一條には「開拓團は一定の區域内に居住する日本内地人開拓民を團員とする團體にして云々」

と特に日本内地人開拓民のみに限定して同法を適用すべきことを明示せるも、其後當局は朝鮮人開拓民の實績に鑑み、彼等にも均しく之を適用するの方針を執り、現に開拓總局にては之が適用を豫想して十一月十一、二の兩日に亘り北安省龍鎮の忠慶、同省嫩江の柏根里第一、同第二及び興安南省東科中旗富有村の各開拓團長を招集して第一回の朝鮮人開拓團長會議を開催し、必要なる指示を與へた。

何れは近く朝鮮人開拓民に對しても正式に之が適用の律令が公布せられること、信ずるから、左に開拓團設營に對する具體的要領を掲げて置かう。

○開拓團設營に對する具體的要領

朝鮮人開拓地經營要領に基く開拓團の設營に關し、左記具體的要領を以て圓滑且迅速なる遂行を期し、理想的農村協同體制確立の基礎を堅固ならしめんとする。特に本案は部落建設過渡期間(即ち家族入植迄)に於ける適用を目的とする。

(一) 會社及團の業務限界

開拓團の設營に關する會社及團の業務限界を左の如く定める。

1. 會社

イ 會社は建設の主體となり團はこれに協力する(經營要領第一項)即ち會社は建設計畫、開墾計畫、營農計畫を樹立實施するも更に實施具體案を作成し、事業別遂行順序並に所要勞力(團員)の配分計畫を團長に明示し、圓滑なる全建設工程の完遂に協力せしめる。

ロ 専ら仕事上の監督指導に當り團員の統制使役は團が之を擔當する。

ハ 團に對する所要物資の購入並に輸送をする。

ニ 其他各般に亘り團長、指導員を誘掖する。

2. 團

イ 團は部落建設に對し積極的協力をする。即ち會社に於て立案指示ある前項計畫に基き團員の統制、團員勞力の配分編成並に勞務督勵をする。

ロ 各個開拓民宛物資配給事務を擔當する。

ハ 團員各個人別所得の經理清算をする。

ニ 團長指導員は會社の誘導に従ひ團の建設運營に邁進する。

(二) 團の組織

1. 開拓團は事務處理の圓滑、建設の促進を圖るため團員を班に分つ。

一班を以て二十五名とする。

2. 各班に長を置く、部落建設完了迄(家族入植迄)は原則として先遣隊員より班長を選定し部落長は定めない。

部落建設が完了した時は改めて班長を選ぶこととし、適任者を選定する又各部落に

部落長を選出せしめる。

3. 團事務所の組織に就ては別途考慮することとするも、團長を以て中核的指導者とし各指導員は團長を輔佐し團長の命に従ひ各般要務を分擔する。

(三) 團貸付經理關係

1. 團に對する貸付經理のため鮮拓社員を經理指導員として各團に駐在せしめる(經營要領第二項)

2. 團に對する融資は一元的に鮮拓が之を行ふ(經營要領第四項)

3. 團の豫算決算に關する事項に付ては團は會社に對し連絡協議する(經營要領第三項)

4. 團に對する資金の貸出は鮮拓に於て事業の實情に即して實施する(經營要領第五項)

5. 團本部本年度經費豫算を至急作成せしめる。

6. 團本部經費中政府補助金に俟つものにして、未だ令達なきものに就きては、會社に於て立替貸付くることとするも縣長の承認を要するものとする。

7. 團の經理規定は別途定むるも(經營要領第十項)暫行的本要領の趣旨に従ひ處置せしめる。

(四) 物資配給關係

1. 物資配給の順序

イ 配給基地は原則として驛前倉庫とする。

ロ 開拓民所要物資は團長の捺印ある物資配給請求書を會社事務所に提出せしめる

ハ 會社事務所は該請求書を査定の上驛前倉庫又は會社分倉庫に對し配給指示書を發する。

2. 配給方法

イ 驛前倉庫に於ては右指圖書に基き物資配給手配をする。

ロ 配給實施は當分の間(團事務所並に倉庫建築まで)各所要部落まで會社の責任に於て運搬をなし、團長の受領書を取得し引渡す。

3. 配給價格

イ 配給物資價格は原則として入植驛(例へば柏根里)着値に三分の物資破損補償率

を加算したるものを以てする。

ロ 各所要部落への配給に伴ふ運搬賃並に諸掛及利息は別途一括算定し各個人平等負擔とする。

4. 各個開拓民への配給

各個開拓民に對する物資配給は直接團に於て之に當る、團は自體の責任に於て所定物資配給傳票に依り各個開拓民に配給を行ひ個人別貸付明細を記帳整理する。

(五) 建設勞賃支給關係

1. 建設勞賃の本質

理想的農村協同體の形成を目途とする開拓團の建設は團の總力を以てする神聖なる協同勤勞奉仕に俟つべきものであるが、これら勤勞に對し勞賃の支給せらるる所以のものは殘留家族の最低扶助料を確保せしめんとするものである。然るに往々團建設の重大勞務、勞賃の本質を忘却し徒らに高價拂を要求するが如きは、これ全く出稼勞働者の類に等しく、共同負擔たるべき建設費は可及的これを低價ならしめ、個人利益を後にして團の共同利益を先にする爲には各人神聖なる勤勞に對する最低勞

賃を甘受すべきである。茲に過去の餘弊を一掃し左の要領により勞賃支給關係を調整する。

2. 勞務の種類

建設關係勞賃を二に分つ

(イ) 請負勞務

(ロ) (イ) 以外を定給勞務

3. 勞賃の標準

勞賃の標準は飽迄最低扶助料を基底とすべく、又勞務の種類に依り各人所得に急激の不均衡を來らしめないやう留意し、更に團に於ける勞務割當に於ても可及的機会均等を念とし、建設勞賃の均衡化を圖る。

(イ) 請負勞賃

請負勞賃の單價決定に當りては會社側に於て一日一人平均二圓程度たらしむ如く査定決定を見るやう意圖する。

(ロ) 定給勞賃

請負勞賃以外を總て定給勞賃とする、一日一人貳圓とする。

(ハ) 勞賃は出勞成績に基きこれを支給する。

4. 査定日

月末を以て勞賃査定日とし、會社は翌月十日以内に支拂勞賃清算書を團に示す。

5. 勞賃の計算方法

(イ) 出勞務者の明細書作成

團に於ては會社より指示の建設所要勞務計畫に基き各班を夫々仕事別割當編成し日々の勤勞狀況に就き仕事別個人別出勞務者明細書を作成する。

(ロ) 勞賃の清算

會社に於ては各請負仕事を檢收の上各仕事每一括支拂勞賃清算書を作成し、又定給勞賃に關しては前項出勞務者明細書に依り清算の上團に示す、但しこの際に貸付食糧代は一括差引く。

(ハ) 各個勞賃の支給

團に於ては社會より通報ある一括請負勞賃清算書並に定給勞賃清算書に基き、出

6. 勞賃所得處分
勞務者明細書による各個開拓民の勞務実績に従ひ各人別所得を算定する。

勞賃所得は左の順序によりこれを處分する。

(イ) 食費の控除

(ロ) 小使最高五圓以内現金支拂ひをなす。

(ハ) 残留家族生計費の送金

團に於て所屬道別一括の上個人別送金明細書を添付し各道知事宛送金する。

(ニ) 團體保險料

團體保險に加入したる時は保險料を差引く。

(ホ) 預金

更に餘剩あるときは團に對し一括預金をせしめ團は之れを信用ある機關に一括預金し、各人別預金口座を團内に開設す、預金は家族入植準備金その他に當つこととする。

九、開拓興農會の結成

鮮系開拓地に於ける開拓興農會の設立に關しては、開拓地に於ける經濟的活動の圓滑を期するため開拓地の特殊性を具有する開拓興農會を設立し、村、屯、協和會分會と密接な關係を保持しつゝ、綜合的運營を圖る筈であつて、該開拓興農會の設立要綱は左の通りである。

- 開拓興農會の區域は原則として數個部落を單位とする開拓地とす、各部落に班をおく。
- 開拓事業の圓滑なる遂行を期し相互の福利増進をはかるため信用、販賣、購買、利用の各種事業を綜合的に行ふ。
- 區域内に居住する開拓民を以て組織し區域内に居住する既往鮮農並に原住民に對しては支障なき限り共同施設を利用せしむ。
- 入植後部落建設を終りたる時は可及的速かに興農會を設立する。
- 會長一名、理事一名、監事二名をおき協議機關として評議員會をおく。
- 興農合作社は縣興農合作社の下部機構たるものとし鮮拓と密接なる連繫を保持する。

第九章 代表的鮮人開拓農村

以上會社の事業を絮説すると共に、之に關聯して在滿鮮農の實態にも相當に觸れて來たが、茲に更めて鮮農開拓團中の一代表的農村とも稱すべき榮興農村に就て少しく詳細に其の實態を紹介して見たい。

蓋し、入植鮮農開拓團も經營その宜しきを得、且つ團員が能く拮据勉勵さへすれば、此の程度の境地に達することの決して至難でないことを示唆するものがあるのみならず、同農村は適々邦農開拓團中の代表的のものとも觀られてゐる第一次彌榮の入植と同じ大同元年(昭和七年)に結成せられたものである點に於ても檢討の價值があり、現に苟も在滿鮮農開拓團を視察する程の人々は概ね先づ此の榮興農村に杖を牽くからである。

一、農村建設の經過

榮興農村は前記第四章中に安全農村として記述せるもの、一つであり、建設當初は營口農村と稱して人口に膾炙されて來たものである。而して其の建設の趣旨も大體は既記

の通りであるが、大同元年に建設されて以來康徳四年及同六年まで數次に亘り或は滿洲事變避難民或は北滿、南鮮水害罹災民の收容、若くは選抜開拓民の補充入植等を行ひて今日に至り、康徳七年には一、八七〇戸を以て四、一八町歩の水田を作付し、粃十餘萬石を生産してゐるが、今後尙ほ年々遞増を見る豫定である。

第一農村 昭和六年九月滿洲事變勃發するや、在滿奧地に於て農耕に従事し居り、聽て目前收穫期に直面しつゝ、跋扈跳梁する兵匪土賊の掠奪暴行の難を辛うじて逃れ、安全地帯たる滿鐵沿線に避難し來る鮮農多く、而も彼等の多數は翌昭和七年春耕期を迎へたるも依然奧地治安の不安なるがため歸還の途なかりしのみならず、避難鮮農尙ほ陸續として其の跡を絶たず、剩さへ同年夏季北滿一帯を襲へる未曾有の洪水は主に低濕地に水田耕作を營みつゝありたる鮮農も加はり沿線各都市に設置されたる官救護所に收容救恤を受くる者のみにても其の數實に三萬餘人に達したる状態であつた。

茲に於て日本大使館、朝鮮總督府、關東軍、滿洲國、滿鐵會社及東亞勸業株式會社等相圖り之れ等避難鮮農に對し恒久的安住の地を與へ生業の基礎を確立せしめんがため自作農創定を目的とせる大規模の安全農村の建設を議決し、當時の東亞勸業株式會社をして之が經營實施の衝に當らしむることとなつた。

而して南滿地方に於ては大同二年二月十一日即ち紀元節の佳節を卜し營口附近遼河沿岸一帯の適地調査班を組織して實地踏査に着手した。

其の結果舊奉天省營口縣下第七區鄭家屯村地方即ち現在の錦州省盤山縣下第九區榮興村の農村一帯の廣漠たる鹽基性土壤よりなる荒蕪地を選定して之れを開拓することに決定した。

一方安東省撫順、四平街方面に避難集合せる鮮農を五月一日より七月十五日に亘り前後九回に及び五百九十六戸、千八百二十一名收容したが是等收容避難民は極力土木工事に役生計を得せしめ、又九月十一日自警の意をも含めて軍當局の斡旋により朝鮮歩兵隊退役者四〇戸を入植收容した。

然るに入村後一家の柱石を失ひて鰥寡孤獨となり朝鮮原地に歸還する者、入村前農耕に經驗なきため勞働を嫌厭し、又は眞に農耕を目的とせず商業を志し移住せる爲め事志に反し離村せる者、或は友人知己の招致により離村する者等尠からず、是等の補充のため康徳元年五月六日更めて朝鮮各道より選拔入植し、同年五月末に於ける戸數は六百二

十戸人口三、〇一九人となり一、五〇〇町歩の作付を見た。

而して本農村は最初收容戸數八〇〇戸一、九二〇町歩の開田計畫なりしが、作付第二年度に於ては除鹽其の他に萬全を期するがため前記の收容作付に止めた。處が偶々昭和九年朝鮮總督府より南鮮水害罹災民五〇〇戸收容方の交渉あり、幸ひ揚水機の能力も充分にして又地區内豫備保留地の利用未耕作地の親規開田等に依り一、五〇〇町歩の既開水田を二、〇〇〇町歩に擴張可能なりしを以て、一戸當水田割當面積を二町歩とし一、〇〇〇戸收容することに決し、同年十月及十一月前後三回に分ち右南鮮窮民四六六戸を入植せしめ、便宜上之れを第一農村と稱した。

斯くて康徳二年度に於ては收容戸數一、〇三五戸人口五、四六一人、作付面積二、三五〇町歩に達し、何れも孜々農耕に従事するに至りしが、同年九月負擔糧の賦課率に關する不満及一部不良分子の煽動に依り不正行爲者續出するに至つたから、康徳三年四月當局は農村民將來の安寧幸福を慮り思想的不良なる者、懶惰にして成業の見込なき者十數名に退村處分をなし、農村民の淨化に努めたる結果爾來農村民の思想頗る溫健となり全く隔世の感を抱かしむるに至つた。

第二農村

滿洲國成立後の新情勢に順應し當局に於ても漸く朝鮮人移民に關する國策的事業の樹立を唱へらるゝに至り、康徳二年度設定安全農村地區選定に關しては全滿各地に亘り調査を行ひたるも、時期切迫したると資金關係其の他を考慮し既設營口農村附近に建設するを最も適當と認められた結果、其隣接地域の荒蕪地中適地約三、〇〇〇町歩を新に買收の上開田面積二、四〇〇町歩一戸當水田割當面積二町歩宛即ち鮮農一、二〇〇戸約六、〇〇〇名を收容することに決定し、用排水、除鹽等の施設は凡て既設置村と同じく遼河の河水を電動揚水機に依り揚水灌漑することにした。

右計畫なるや、同年八月直ちに土地買收測量其の他諸工事に着手すると同時に開墾を行ひ秋季結水期までに約一、二〇〇町歩の開墾を終り、翌年四月までに移民家屋六〇〇戸を新造し又滿人家屋をも買收利用し、四月中に朝鮮各地方より四四三戸二、一三二人在滿自由移民中より一五〇戸六六五人計五九三戸二、七九七人を嚴選收容し一、二〇〇町歩の作付を了した。

次いで康徳三年秋新に移民家屋一九六戸を新造し、更に地域内にて買收せる滿人家屋をも補修し、一方六〇〇町歩の開墾を了し、翌四年四月には鮮内慶尙南北道より各一〇

○戸宛計二〇〇戸、在滿自由移民中より一〇〇戸計三〇〇戸を選抜入村せしめたる結果、總收容戸數八九三戸、四、二五〇人蒔付面積一、七八〇町歩に達した。

斯くて榮興農村の全地區入植完成の曉は收容戸數二千二百戸乃至二千三百戸人口一萬數千人、作付面積四千八百町歩乃至五千町歩に達し、將來土地改良完成の上は其の生産糶二〇萬石乃至二五萬石に達し之れが金額石當り十圓とし實に二百萬圓乃至二百五十萬圓を望み得る見込みである。

而して康德三年九月十五日滿鮮拓植株式會社の設立を見るや、會社は元東亞勸業株式會社に代り本事業の經營に當り、着々事業完成の域に向つて努力しつゝあるが康德四年度より第一農村は自作農としての年賦償還を開始し、十五箇年を以て償還を完了せしむる方針である。

又康德四年四月一日より會社は村民の自覺を促し、自力更生に依り新生滿洲國家の公民として名實共に備ふる農村民たらしめんがため、農村の管理經營を農村民の自治機關たる農務稷聯合會に委任管理せしめ、會社は監督官廳と相協力して専ら村民の輔導誘掖に努め村め村勢の増長發達を計りつゝある。

二、耕地面積

1. 總面積 六、五五六町歩である。

2. 作付豫定實行總面積四、八〇〇町歩にして總面積に對し七割二分強である。

3. 用排水路堤防其他宅地及び雜地等の面積は一、七五六町歩にして總面積の二割七分強に當る。

4. 康德六年度作付面積は四、二〇〇町歩にして將來開墾し作付し得る面積は尙ほ八〇〇町歩の見込みである。

三、計畫の概要

1. 設置の目的 當農村設置の目的は鮮農を安住せしめんがための年賦償還に依る自作農創定にありて、第一農村は康德四年度より十五箇年間の年賦とし、内二箇年間は總體的償還により建設費の償還を開始して來たが、康德六年度よりは康德二年より開拓中の第二農村も其の建設事業を打ち切りて、第一農村及び第二農村の設定費の區分を廢し、之

れを合同せしめ一單位となし、更に康徳六年より同十年に至る五箇年間は農家の負擔率を年賦金及び村公費をも含め總生産量の三割五分となし、此の期間を所謂總體的償還期間となし、内前期三箇年間は二十五箇年の年賦、内後期二箇年間は二十箇年の年賦とし、此の間可及的豫算の許す範圍内に於て土地改良を促進し、生産量の増加を圖り、以て農家の個人經濟力を充實せしめ、一方土地等級査定を完了して、康徳十一年度より十箇年間の個人年賦償還を開始し、全戸自作農たらしむる方針である。

2. 一戸當割當面積 一戸當耕作面積は二町歩(第二農村)乃至二町四反歩(第一農村)にして、尙ほ外に將來菜園地及び放牧地用として一戸當二反歩乃至三反歩の割當て地あるも除鹽の關係を考慮し、現在水田として利用しつつある。

3. 完成後の收容戸數 當農村は康徳六年度四月に於ける總收容戸數一、九〇〇戸、一萬餘人を以て一旦收容を打ち切る方針であるが、尙ほ未開拓地約六〇〇町歩及び將來沼澤地其他雜地の利用計畫を樹立することにより、更に二〇〇町歩を加へ得るを以て合計八〇〇町歩四〇〇戸を收容し得る見込みである。

4. 完成後の作付面積 康徳六年度作付面積四、二〇〇町歩を以て一旦建設事業を打ち

切る方針であるが、目下土質其の他の點を考慮し未作付地となし置く六〇〇町歩及び沼澤地其他雜地等の開拓計畫樹立することにより、更に二〇〇町歩を増加し得るがため、總作付面積五、〇〇〇町歩に達せしめ得る見込みである。

四、開拓地の内容

1. 作付面積及收量…—設定以來各年度別戸數作付面積及び總收納量等を表示すれば左の通りである。

年 度 別	作 付 戸 數	人 口	作 付 面 積	總 收 納 量	一 戸 當 收 量
大 同 二 年	六 七 五	三、〇一二			
康 徳 元 年	六 二 二	三、〇一九	一、四七九・八七 _町	二八、九四二・五一 _石	四六・五三
康 徳 二 年	一、〇三五	五、四六一	二、四七七・〇〇	四二、三七〇・四〇	四〇・九四
康 徳 三 年	一、五七四	七、八七九	三、三一九・四八	五八、九七七・一七	三七・四七
康 徳 四 年	一、八六八	九、四八七	四、〇一七・五六	七八、四七一・一六	四二・〇七
康 徳 五 年	一、七二〇	九、六六九	三、九五五・二一	九四、三二八・六九	五四・八四
康 徳 六 年	一、八三四	九、八六四	四、二〇〇・〇〇	一〇八、三九八・七五	五九・一一

康德七年度 一、八九五 同 上 四、二〇〇・〇〇 二〇七、七二七・〇〇 五七・六〇

2. 總建設費...—上記四、二〇〇町步收容戸數約一、九〇〇戸に對する總建設費は左の通りである。

費目	金額
土地	四〇八、五四〇・三二
營造物	六二、〇四五・四三
農事費	九一、〇八〇・二一
農屋	一七二、七二一・三七
機器	五、三四九・〇五
動物	七二八・三九
總掛費	二四六、六四〇・五二
其他	一、八〇七、一〇五・二九
合計	

3. 經營費...—設定費を除いた經營費に關しては、康德元年度の作付初年より同四年三月末までは會社に於て直接管理し、其の經營費は之を管理費（負擔金又は負擔額と稱す）と云ひ、其年の經營費歳出入豫算額に應じ各農家より生産量に對し一定率を、

徴收充當し、若し年度末收支決算額に於て増減を生じた場合は之を設定費に繰込む方針を採つて來たが、強鹽分地にして而も開墾當初に屬し、鹽害が多い計りでなく、機械灌漑であつて多額の維持經營費を要したにも拘らず、四割以下の負擔率にて幸ひ收支は毎年黒字となつて好成绩を示した。

而して康德四年四月一日より會社は既記の如く、農村の管理經營を農務稷聯合會に委任した結果、一般に之を聯合會費と稱してゐる。

康德元年度より康德七年度に至る農村民の負擔狀態を示せば左の通りである。

○康德元—七年農民負擔狀態表

年度別	農村別	粃總收量	負擔率	負擔額
康德元年度	第一農村	二八、九四二・五一	三・五〇	一〇、二二九・八八
同	第二農村	四二、三七〇・四〇	四・三〇	一八、四一二・三一
同	第三農村	四八、五四四・四五	三・七〇	一七、七六八・四七
同	第四農村	一〇、四三二・七二	三・四〇	三、五八三・〇二
同	第五農村	五五、一六三・〇五	四・〇〇	二二、四二六・六三
同	第六農村	二三、三〇八・一一	三・七〇	八、六七五・七二

同 五年度	第一農村	六二、七五三・〇四	三・〇五	一九、四六〇・三一
	第二農村	三〇、五七五・六五	三・三〇	一〇、一一〇・二九
同 六年度	第一農村	一〇九、二八〇・〇〇	二・九七	三二、五〇五・〇〇
	第二農村			
同 七年度	第一農村	一〇七、七二六・〇〇	三・二〇	三三、四八〇・〇〇
	第二農村			

備考

- (1) 康德四年度の負擔中には教育衛生に關する經費をも含む。
- (2) 同五年度以降の負擔中には村公所負課税をも含む。
- (3) 康德五年度の負擔中には年利八分一五箇年賦金をも含む。
- (4) 同六年度の負擔中には年利八分二五箇年賦金及村公所負課税をも含む。
- (5) 康德六年度迄に於ける負擔率は實收量に對する比率である。
- (6) 單位靱石は滿洲石である。

五、農事概況

1. 品種 當農村に於ける栽培品種は康德元年—開墾初年目に於ては強鹽分なるを以て、收量品質に重きを置くよりも強健にして栽培容易なる品種を選定することに決し、營口附近に於て従來栽培されたる大邱祖種を作付したるも、收量品質劣等なるを以

て、康德二年度に至り滿鐵農事試験場熊岳城分場の成績等を參考として平安北道より陸羽一三二號種を輸入作付したる結果、成績良好なりしを以て康德三年度よりは大邱祖の作付を禁止し専ら陸羽一三二號種を栽培するに至つた。

又將來一層優良なる品種を選定するがため、康德三年度より熊岳城農事試験場の委託に依り品種試験を實施して來たが、其の結果農村一號信友早生の二品種は熟期早く收量品質共に良好と認められ、特に信友早生は栽培容易なるを以て漸次獎勵する方針である。

又康德四年度より品種對播種期試験の結果に依れば、左記品種は當農村に於ける再播用品種として優良なるを確めた。

(A) 六月十日前後に再播する場合は農村一號を最適當とする。

(B) 六月十日より六月二十日まで再播する場合は衣笠を最適當とする。

(C) 六月二十日より七月五日まで再播する場合は青盛を有利とする。

糯種にありては熊岳城農事試験場産紅糯收量品質共に良好なるにより専ら本種を獎勵しつゝある。

2. **播種** 當農村に於ける稻作は直播にして、苗代は鹽害其他發芽不良なる場合、移植又は補植用として所謂豫備苗代を設くるに止まれども、赤米主として脱落稻の撲滅及雜草の驅除水利費の節約等を考慮する時は、插秧法も重要なを以て漸次奨励する方針である。

3. **播種量** 播種量は反當粃日本粃一斗の割合とする。

4. **播種法** 播種法は畦幅一尺乃至一尺二寸とし蒔繩を張り蒔繩に沿つて手にて條播する。

5. **播種期** 自五月五日至五月二十五日。

6. **除草** 四回乃至五回主に手取なるが一回乃至二回中耕除草器を使用す雜草の主なるものは、「エゾノウキヤガラ」「アゼテンツキ」「ウシノケ」「ガマ」水稈等である。

7. **灌溉及排水** 開墾後四、五年を経過した水田は除鹽を行はないが、一回除鹽し播種すれども新墾地若くは強鹽分地は二乃至三回除鹽を行つた後播種する。

除鹽の方法は耕起後灌水し、五月上旬にありては五日乃至七日間五月中旬の場合は四、五日間灌水し後排水す第二回は五月上旬の場合は四、五日間五月中旬の場合は二三日間

灌水したる後排水する。

灌水は二、三寸の水深を標準とし開墾四、五年後の土地は七日乃至十日間位を以て換水するも強鹽分地は四、五日間を以て換水する。

九月中旬灌溉を停止すれども爾後四回の濕潤を保つ程度に時々灌水し收穫期に近付くに従ひ徐々に排水し田面の乾燥を計る。

8. **收穫期** 自十月上旬至十月下旬。

9. **肥料** 肥料は石灰窒素及硫酸アンモニヤを主とし最近過磷酸石灰及堆肥大豆粕、米糠を施すものあれども僅少である。而して施肥に就ては農民の栽培法に對する智識及技術の向上と相俟ちて漸次用量の増加を計る方針を取りつつある。

10. **增收目標** 當農村は強鹽分地にして土地の生産力に著しく差異あり、従つて土地の改良最も急を要するところにして各部落毎に增收目標を定め生産力の増進に努めつつある。

11. **家畜** 當農村に於ける農家住宅地は密集し居るがため、家畜の放飼又は畜舎を設くべき地域狭少にして家畜の飼養甚だ振はざれども、畜力の利用自給肥料の増産等を

考ふる時は、家畜の飼養は最緊急事項なるを以て、將來放牧地及菜園地として準備し置きたる地に農屋を分散せしめ、之れが飼養増殖を計る方針であり、現在飼養せる家畜數を表示すれば左の通りである。

年 度	牛	馬	豚	鶏	家鴨	犬	摘	要
康 德 七 年	一三七	四	一九四	二五八	一八	三五五	二月末調査	

12. 副業 副業としては將來莞草細工の如き高級副業を奨励する方針なるも、現在臥菴繩は供給不足の状況なるを以て、之が増産を計らんがため、各部落に對し責任數量を定め生産増加を計りつゝありて、各年度の生産高は次の如く昨年度の停滯を除き、大體逐年増加の一途を辿つてゐる。

○各年度の生産高表

康 德 四 年 度	三九、一一八
同 五 年 度	四六、三〇六
同 六 年 度	六〇、一八四

(單位日本粃石)

同 七 年 度 五九、二四九

13. 農家の經濟狀況 農家の收支狀態を知らんがために農家を選定し、經濟狀況を調査せる結果を表示すれば左の通りである。

項 目	中央區金額	十二區金額
收 入	一、一三九・四二	九二八・五八
支 出	八六二・一二	七六八・三六
差 引 利 益	二七七・三〇	一六〇・二二

14. 精米工場 康徳三年朝鮮總督府より一萬圓の補助金の下附を受けて建設したが、康徳四年擴張増補したるも設備不完全なりしを以て、康徳五年秋滿鮮拓植會社奉天精米所に委託し四萬石の粃を搗精し得る程度に補修工事を施行し、同十二月より作業を開始し一日白米一二〇石内外を搗精しつゝある。

六、諸 機 關

1. 滿鮮拓農村事務所 昭和八年二月農村建設事業に着手するや、會社は銳意諸般の

施設に努力し着々完成に努め、康德三年度末一部の建設事業を除き略完成の域に達したから、會社は從來會社が爲し來れる農村の管理經營は康德四年四月一日より農村駐在員をして聯合會の補導誘掖に當らしめつゝあるが、現在主任外一名駐在し、尙ほ康德五年十二月より聯合會精米工場を會社精米所に於て委託經營することになりたるにより三名在勤専ら搗精作業に當つてゐる。

2. 農務稷聯合會 康德四年三月三十一日までは農務稷聯合會は専ら教育衛生其の他一般公共事業を分擔して來たが、同年四月一日に至り會社より農村建設に關する事業を除く外一切の管理の委任を受け、又從來營口農村河北金融會が執り來りたる農村民の金融業務をも繼承し、農耕資金及び生計費の貸付回収をも併せ行ふことゝなつた。

次いで康德四年十二月一日治外法權撤廢と同時に教育衛生等の行政方面に關する施設は擧げて新設せられたる榮興村村公所に委讓するに至り、聯合會は會社指導のもとに専ら移民農地の管理經營に當りつゝあるが、次に農務稷聯合會の業務及び機構を示せば左の通りである。

(A) 業 務

- (イ) 土地其の他施設物の經營及び管理
- (ロ) 營農資金貸付及び回収
- (ハ) 農事指導獎勵及び副業の助長
- (ニ) 生産物の保管
- (ホ) 農耕材料若くは日用品の共同購入生産物の加工及び共同販賣
- (ヘ) 家畜改良繁殖防疫及び保険
- (ト) 滿鮮拓植株式會社の業務の代行
- (チ) 前各號の外會員のため共同處理

(B) 機 構

會長一名 理事一名 主事一名 出納役一名
書記及び技手其の他若干名
評議員會

議長(會長)一名 評議員二六名諸係を表示すれば左の如くである。

會長……理事		事業部	
金融部	出納係	倉庫係	購買係
貸付係	經理係	水利係	農務係
書記二名	書記一名	技手一名	技手二名
雇員一名	雇員二名	雇員二名	雇員四名
		雇員二名	雇員一名
			書記二名
			庶務會計係

3. 村公所 康德四年十二月一日治外法權撤廢さるゝや、滿洲國は當農村及び農村外附近滿人部落を包括して新に榮興村となし村制を實施するに至りたる結果、從來農務稷聯合會に於て執行して來た農村の教育衛生等行政に關する事項一切を擧げて榮興村村公所の接收するところとなつた。

村公所は目下農務稷聯合會事務所構内に設け康德五年五月十九日より業務を開始し、

村長(榮興農村民)一名村吏員朝鮮人五名執務しつゝあり。其の康德七年度の歳入出豫算額は左の通りである。

歳入	歳出
一、經常部豫算額三萬九千四百九十四圓	一、經常部豫算額三萬三千七百五十三圓
一、臨時部豫算額三萬九千八百二十五圓	一、臨時部豫算額四萬五千五百六十六圓
合計 七萬九千三百十九圓	合計 七萬九千三百十九圓

次に本年三月末榮興村の戸數及び人口を表示すれば左の通りである。

區	別	戸數	男	女	計
内地	朝鮮人	二、二二二	一八	九	二七
			五、八二五	四、九四五	一〇、七七〇
					二二七

滿洲	人	計
三五〇	一、三二二	一、四〇二
二、四八三	七、一六四	六、〇三五
		一三、一九九

4. **田庄台警察署榮興村駐在所** 本駐在所は元營口警察署の管轄に屬し、昭和八年三月農村建設事業開始と同時に派出所を設置當時治安安全からざりしがため二十數名の警官駐在し、専ら治安維持に任じ、爾來年と共に治安安全く、村民の思想又穩健漸次安定を見るに至つた。

康徳三年六月會社は一萬餘圓を以て現廳舎及び警察官宿舍を建築して之れを提供した。康徳四年十二月治外法權撤廢後關東局より滿洲國に移管され行政區域の變更と共に盤山縣公署警務科に屬することになつた。

5. **榮興村郵政局** 康徳三年秋會社は村民の便益を慮り二千圓を以て現局舎を建築して提供し、同年十二月一日より營口農村郵政局として電信電話の委託業務を除く外郵政業一切を取り扱つて來たが、法權撤廢後康徳五年七月榮興村郵政局と改稱せられ、錦州郵政管理局の管轄に屬し、目下局長(朝鮮人)一名事務員(朝鮮人)一名集配人五名が執務しつゝある。

6. **學校** 昭和八年移民の收容を開始するや七月東亞勸業會社従業員及警察官は餘暇を利用し農村内兒童三百餘名に對し戸外に於て體操國語算術童話等の教授をして來たが、十月に至り第三區第四區第八區の三個所に移民住宅各一棟宛を内部模様替をなし、寺小屋式(農村書堂)教育を開始した。

翌康徳元年四月、農村假事務所(木造)バラックを改造の上、茲に兒童を收容し同年秋朝鮮總督府よりの補助金に依り現本校舎の新築を見たが移民の増加に伴ひ就學兒童が増加したから依然假校舎も利用八學級を編成し、午前午後に分ち營口農村書堂として形體を整へ授業を開始するに至つた。

斯くて康徳三年本校舎を増築すると同時に第二農村東大井に第一分校を設置し本校一〇學級分校三學級とし更に康徳四年本校の増築を行ひ本校十二學級分校四學級に擴張。而して昭和八年農村書堂として朝鮮總督府教育令に基づき農村子弟の教育をして來たが、康徳三年秋學級の増加と内容の充實に伴ひ普通學校に昇格し、康徳四年十二月法權撤廢と同時に滿洲國に移管し、榮興村國民學校及國民優級學校と改稱され、年と共に就學兒童も増加し、校舎狹隘を來すに至つたから、六年度に於ては本校及第一分校の増築

を行ふと同時に有雁溝屯に第二分校を増設した。現在校長(内地人)以下教職員内地人四名朝鮮人一四名にして児童數は一、一四八名に達し本年度學校費豫算額は三萬四千八百八十八圓である。

7. 醫院 榮興農村病院は大同二年五月移民收容開始と同時に朝鮮總督府より囑託醫一名の派遣を受け、七月より假診療室を設け移民の診療に當つたが、今年九月總督府の補助金により診療室の新築なるや此處に移轉し専ら村民の醫療を施して來た。爾來逐年入村者増加と共に診療患者數も増加し診療室狹隘となつたから康徳五年聯合會より一千三百圓を寄附支出し増改築を施行した。

村民の衛生状態は夏季飲料水の關係上内科に屬する患者多く、又六七月の頃農繁期に於て一種の皮膚病(腫物)の發生多く「マラリヤ熱」も亦相當發生を見る外、他に風土病と認むべきものなく概して衛生状態良好である。

而して患者の最も多きは外科患者にして二八%、内科の二四%、之に次いで小兒科二三%、皮膚病泌尿科の一二%、眼科六%、耳鼻咽喉科三%、其他四%の割合を示した。飲料水は當農村一帯が強鹽分地なるがため農村建設の當初より既に六十數眼を鑿井し

たるも、飲料水として適當なる地下水を得難く、現在「クロール」分稍少く辛じて使用に堪え得るもの僅に四眼に過ぎず、従つて農民は附近滿人住民と同様に各部落毎に貯水池を設けしめ、遼河より揚水せる灌漑水を導き一旦泥土を沈澱せしめ、其のまゝ又は明礬を投じ飲料其他に供しつゝあるがため、若し一旦傳染病の發生を想ふ時、實に慄然たるものあり、蓋し將來村民の衛生保健上よりも水道の施設を必要とする。

而して冬季結水期に於ては貯水池及用水路、又は遼河の堅氷を採取し溶解して使用しつゝある。

8. 自衛團 舊朝鮮歩兵隊退役者即ち在郷軍人移民を主體とし自衛團を組織せしめ榮興村駐在警察官指導に當つて居るが、現在團員三、六〇〇名にして各部落には朝鮮總督府の補助金により自衛團詰所一棟宛を設置し部落民の集合所をも兼ねしめてゐる。

9. 神社 村民に對し敬神思想涵養のため又信仰の中心たらしめんがため農村神社建立敷地として三千餘坪の地を準備しつゝある。

10. 國旗掲揚臺 各部落には國旗掲揚臺を設け毎月一日十五日及祝祭日には國旗を掲揚し國の尊嚴國體觀念の保持涵養に努めてゐる。

11. 商店 農村民日用品の購入を便ならしむるがため農村内に聯合會購買係の外に戸である。

12. 農村建設記念碑 農村建設の趣旨及其の偉業を後世に傳へ仰がん爲め昭和十五年經費一萬四千圓を投じ中央部落に記念碑を建設した。

(追記)概評…上記榮興農村に於ける農家の經濟狀況を概觀するに、標準的ニ農家の收支計算に於て見るが如く、素より赤字ではないが、差引純益は一六〇圓乃至二七七圓といふのであるから、耕作面積二町歩といふ最少限度の營農としては、先づ／＼上首尾と言ふことが出来やう。

但し、南滿に於て殊に遼河の永遠の流れを大規模な電動揚水機に依つて汲揚げてゐるのであるから、旱害に因る天災は無い筈であるが、冠婚葬祭等の外萬一不慮の出費を要する事態が生じた場合、聊か心細い感じがないでもないと思ふ。

之が爲には水田耕作が主であるから必ずしもプラウ農法を採用せよとは云はぬが、今少しく家畜の使役に意を用ひて雇傭勞賃を低減せしめると共に、化學肥料以外の家畜による自給肥料をも生ぜしめ、且つ蔬菜を盡く滿農から購入するの不經濟を排して、其の

自家生産を心掛くべきであらう。左すれば同村農家の純益は直に少くとも數百圓となり一段と堅實な經營狀態たり得るものを信じ敢て之を慫慂したい。

尙ほ同農村に於ける最大の弱點である處の飲料水缺乏の問題に就ては、現に灌漑水に藥品を用ひて彌縫するとか、或は滿鐵地方事務所の其れを少量分讓に與つて漸く凌いでゐるとの事である。左様な姑息な措置を以て一時を糊塗してゐることは素より關係者の本意ではあるまい。本文中にも關係者の苦心の跡は窺はれなくもないが、將來の發展上からも、また代表的農村としての矜持の上からも、是非とも成るべく速に英斷を以て完全な上水道建設の實施が望ましい。

然れども該農村を概觀すれば、第一には各種の避難民或は罹災者を收容して政策的に建設した農村である點、第二には問題の所謂アルカリ地帯を能く改良して水稻作に大成功を贏ち得た點、更に第三には比較的高臺とも稱すべき、即ち水田造成に不適な地勢的惡條件をも克服、遼河の水流を電動揚水機によつて導入した點は、共に特筆に値し將來の滿洲に於ける水田經營上に幾多貴重なる示唆を與へたものと稱すべきである。

第十章 滿洲の開發と鮮農

一、會社取扱鮮農の水稻作

會社關係の上記各種農場、農村、土地に亘る鮮農の水稻作付面積及収穫高を表示すれば左の通りである。

○會社關係鮮農の水稻作況 (康德七年度)

經營形態別	戸數	水田作付面積	収穫高	町當收量
(1) 自作農創定契約地(五)	三、六三九	八、四二三町	一九八、〇八七石	二三・五二
(2) 自作農豫定地(三一)	八、八八四	六、九四三	八七、七六〇	一一・六四
(3) 小作地(一六)	三、一六一	六、三三八	一四九、一三二	二二・一五
計	(五二)	一五、六五七	二一、三八〇	四五〇、二八七 平均 二〇・三八

二、米穀生産上に於ける在滿鮮農の地位

上記の収穫高四五萬石は會社の經營に係る鮮農一五、六五七戸のみに依る生産である

つて、而も其内には入植後日尙ほ淺くして充分なる生産能力を發揮するに至つてゐない鮮農を多分に含んでゐるのであるから、一般在滿鮮農約二〇萬戸に依る収の生産比率は更に遙に多量であると見なければならぬ。

在滿朝鮮人農家は幾何戸であらうか。在滿朝鮮人總數を最少限度の一二五萬人と見て、其の約八割が農民であると云ふから、人口にして一〇〇萬人、戸數にして約二〇萬戸と観るが最も妥當であらう。

而して此の約二〇萬戸の鮮農が最も得意とするのは水田耕作であるから、在滿鮮農の主要な生産が水稻であることは言ふまでもない。鮮農の水利に對する鑑識は眞に天稟とも稱すべく、地の高低を見て水を如何に導くかの判断の正確さと、導水の巧妙さとは全く驚嘆の外ない。彼の分散開拓民が土地を求めて歩みを續け、苟も水の流れと名のつく程のものがあれば、決して之を見遁すことなく、必ず其處に小やか乍らでも水田を構へて米作を始める。一般の思ひも設けぬ山間僻地に、滿農とは懸け離れて唯だ二、三の鮮農が、甚だしきは唯だ一戸で小田を守つてゐると言ふやうな健氣な光景に接することさへ稀れてはない。

南北滿洲を通じて従來滿農が棄て、顧みず、全然手をさへ染め得なかつた低濕地は、鮮農が我が恰好の職場とばかりに之を見付けて水田と化して行つたのである。滿洲事變前既に百數十萬石と云はれた滿洲の米も實は此の鮮農に依つて世に出たのである。

鮮農に由つて水田耕作を教へられ其の有利なことを知つて來た滿農中にも、近年漸く水田に脚を入れることに慣れて水田作を試みる者が現はれて來た。彼の安奉線の車窓から眺められる水田は概ね此種滿農の手に成るものである。

然れども其の營農の實績に於ては、鮮農と滿農との間に尙ほ格段の差がある。試みに鮮農、滿農及邦農の水田經營の實績を比較して見ると次の如く、斷然鮮農が其の優位を占めてゐる。

○滿、鮮、邦農の水稲作比較表 (康徳六年度)

	水田作付面積	籾收 穫高	町當收量
鮮農	二四四、〇〇三	六、七五二、〇〇四 ^石	二七・六七
滿農	三四、二二三	六八九、一三一	二〇・一三
邦農	七、三五三	一四六、二四六	一九・八八

計

二八五、五七九

七、五八七、三八一

二六・五七

三者の比率
 鮮農 〇・八五
 滿農 〇・一二
 邦農 〇・〇三

尙ほ全滿に於ける陸稻の籾一、〇六〇、五二九石は、殆ど全部滿農の生産に係るものであるから、滿農の水稲、陸稻を併せた米穀の總生産高は都合一、七四九、六六〇石となり、前記鮮農の水稲生産高六、七五二、〇〇四石に比して、約二割六分に當つてゐる。

之を要するに滿洲の米穀生産上に於ける鮮農の地歩は、其の水稲作に於て八割九分、水稲、陸稻を併せた全米穀生産上に於ける其れは約七割と言ふことになるものと見る可きであらう。

三、鮮農の籾生産費檢討

因に在滿鮮農の籾生産費を調べて見やう。會社事業課の調査に係る開拓地鮮農の籾生産費は次の通りである。但し此の調査は康徳五年の調査であることを理つて置く。

1. 集計方式…生産費算出の方式は、一般生産費計算に於て行はれる土地費、土地

資本利子、農舎費、農具費、自家勞賃、雇傭勞銀、肥料、種苗、諸材料費、資本利子、公租公課の集計に依る直接間接生産に關與せる諸費用より概原價計算を算出した。
 2. 集計地及集計農家…集計地は北滿の綏化、中滿の鐵嶺及び南滿の榮興地區にして、農家は何れも會社管理下の自作農創定地の農家である。

3. 粃一石生産費計算方法…粃一石の生産費計算は左の方法によつた。
 但し蕎反當價格は綏化一圓四十錢、鐵嶺二圓四十錢、榮興二圓二十五錢である。

(生産費總額—蕎反當價格)+反當粃收量=粃一石生産費

4. 各農家の經營内容…各農家の經營内容は左の通りである。
 綏化…水稻作農家 耕地面積二町四〇
 鐵嶺…自作地四町、自作農創定地二町一〇
 榮興…同上 耕地面積二町

5. 反當粃生産及び粃一石當生産費…反當粃生産費及び粃一石當生産費は左表の通りである。

○反當粃生産費

費目別	地區別			平均
	綏化(北滿)	鐵嶺(中滿)	榮興(南滿)	
土地資本利子	五三〇	六二二	九九九	七二四
農舎費	〇六三	一七六	一一一	一七二
農具費	〇八八	〇四九	〇三二	〇五五
自家勞働費	六四七	九八三	九三六	八五三
雇傭勞働費	七四二	一三六一	一三七〇	一〇九一
畜力費	—	一六六	—	〇五五
肥料費	〇八六	一三八	一六三	一三九
諸材料費	〇七〇	〇六〇	〇六〇	〇六三
種苗費	一〇四	一三〇	二四四	一五八
資本利子	〇九三	一三五	二〇四	一四〇
公租公課	三三三	三三〇	三三〇	三九一
計	三七五	四一九	四三六	三六五

○粃一石當生産費

綏化の場合	$(27.50 - 1.40) + 2.75 = 9.49$
鐵嶺の場合	$(40.19 - 2.40) + 3.79 = 9.97$
榮興の場合	$(42.26 - 2.25) + 4.25 = 9.41$

6. 概観…一畝一石當の生産費は北、中、南滿に於て大差なく、大體九圓五十錢内外となつゐるが、前記の如く該調査は康徳五年度の調査であつて、其後畝生産費の一主要部分を占める雇傭労働費が翌六年度には約二倍に奔騰したから、同年度の畝一石の生産費は約十二圓となつてゐる。同七年度の雇傭労働費は殊に北滿に於て一段の昂騰を告げてゐるから畝の收買公定價格十四圓は決して高きに失してはゐないと思はれる。

次に反當畝の生産費に就て見れば、北滿に於て最も低廉であり、中、南滿と南下するに従つて高騰を示してゐる。而して其の原因は(1)土地資本利子(2)雇傭労働費(3)種苗費(4)營農資本利子等何れも南滿は北南に比して二倍内外に及んでゐるから、公租公課に於て獨り稍々輕少なるにも拘らず、總生産費に於て結局南滿の方が北滿よりも五割強の高騰を示す所以である。

尙ほ肥料費に於て南滿の方が北滿よりも約二倍を要してゐるのは、南滿の地力が漸く減耗せるに對して、北滿は開耕されて尙ほ歲月の浅いだけに、地力の餘裕殘存を物語つてゐる。

更に南、中、北滿の各地域に於ける鮮農の水稻作が、總じて畜力を利用することに餘

りに無關心過ぎることを指摘せざるを得ない。素より水田作には畑作ほどに畜力に俟つ餘地の多くないであらうことは認められるが、其れにしても上掲の表示せる僅に中滿鐵嶺の農家のみが若干畜力を利用してゐるに過ぎずして、北滿も南滿も共に全然之を利用してゐないことは、果して如何なものであらうか。

分けても北滿に於ては大に畜力を利用することは、營に雇傭労働費を節減し得るのみならず、農耕能率を高める上にも、將た酪農として收益を増加せしめる上よりするも特に強調せざるを得ない。

四、在滿鮮農の畑作其他の生産

斯くの如く在滿鮮農は水稻作に於て格段の能率を示してゐるが、地勢上水田作を許さざる地方に在りては畑作に勵み、彼の移住鮮農人口の密度の最も濃き間島省に於ても畑作を以て主なる農産業としてゐる。

全滿各省に亘る鮮農の畑作付面積は間島省に於ける約二〇萬町を筆頭に通化、奉天、興安南各省以下全滿を通じて約一二六二、八六〇町と、水田の作付面積にも優つてゐる。

而して之が生産も康徳六年度に大豆六八六、五四〇石、粟五〇八、〇一三石、包米二四五、二四八石を始め高粱小麥、其他の豆類及雜穀を併せて二、三八二、六一二石を生産してゐる。

彼の間島省の山間を旅行して附近の小山や丘陵が、其の頂邊まで盡く開耕されてゐる特異の情景を目撃するのも、鮮農の勤勉力行を如實に物語るものである。

尙ほ在滿鮮農の飼育せる家畜、家禽の類も、矢張り康徳六年末に於て牛五七、七三四頭、馬一〇、一八七頭、豚一九七、五〇〇頭、羊二、一一〇頭、騾馬及驢馬三、九二五頭、鶏三二七、二三四羽、家鴨二、八九五羽を算してゐる。

更に其の副業としては叭、繩、筵、木炭、薪、麻織、割箸、鶏卵以下三十數種をも數へ、其の年産額も二、五三九、二五〇圓に達してゐる。

五、在滿鮮農農家の收支

爰に在滿鮮農農家の收支といふも、地域は南北滿洲の殆ど各省各地方に互り、自ら地價も、物價もまた生活文化の程度も夫々同一でなく、又幸に水田を主とし得る地域と、

餘儀なく畑作を主とせねばならぬ地域とがあるから、彼れ是れ一概に之を明確に調査することは至難であるが、左に會社事業課の調査に係る康徳五年度に於ける標準的な在滿鮮農の收支計算を紹介して見やう。

(甲) 水田作の場合

1. 南滿地方に於ける場合

農家一戸の家族員數を五名(從農者二名、非從農者三名)とし、最少限度の雇入を以て水田二町を自作する場合の收支。

(イ) 收 入		四七七・七〇			
費	II 作付面積	總收量	單價	金額	備 考
糶	三反	五〇〇石	八・五〇	四、三〇〇	過去五箇年の平均單價
藥	(三〇)	九、四〇〇斤	三〇〇	二、八二〇	(單位千斤)
副業 收入	—	—	—	三、四五〇	
合 計	—	—	—	四、七七〇	
(ロ) 支 出				三、四〇〇・四二	
A、營 農 費				九八・四二	

費目	金額	摘要
種子代	一七・八〇	粳二石、單位八・九〇
農具費	五・五〇	
飼料費	九・一二	
雇傭費	四二・〇〇	反當三人、單位七〇錢
肥料代	二〇・〇〇	反當一圓
其他	四・〇〇	雜費
合計	九八・四二	
B、家計費	二四二・〇〇	
食料費	一五六・〇〇	
被服費	一九・〇〇	
光熱費	二七・〇〇	
教育費	五・〇〇	
税金	一六・〇〇	地稅、地捐、街村費其他
諸團體費	五・〇〇	
借入金利息	一四・〇〇	借入金二四〇圓、年利一割二分、一〇箇月分
計	二四二・〇〇	

支出計 三四〇・四二
 差引益金 一三七・二八

2. 北滿地方に於ける場合

家族及雇傭關係同上、水田二町四反を自作する場合の收支

(イ) 収入	作付面積	總收量	單價	金額	備考
糶費	二四反	五七石	八〇	四〇〇〇	此の單價につき同上
糶副業收入	(二四)	一〇八〇斤	二〇〇	三六〇	此の單位も千斤
合計	二四	—	—	五〇一・六〇	
(ロ) 支出				三二七・〇二	
A、營農費				八一・二四	
種子代				二二・四四	粳二・六四、單位八・五〇
農具費				五・五〇	
飼料費				一四・六〇	
雇傭費				三三・六〇	反當二人、單位七〇錢

肥料	五〇〇	肥料を用ひず
其他	八一・一四	
計	八二・一四	
B、家計費	二三五・八八	
食料費	一四四・〇〇	
被服費	二四・〇〇	
光熱費	二四・〇〇	
教育費	五・〇〇	
税金	一四・八八	地稅、地捐、街村費其他
諸團體費	五・〇〇	
借入金	一三〇・〇〇	借入金二三〇圓、年利一割二分、一〇箇月分
計	一三五・八八	
支出合計	三一七・〇二	
差引益金	一八四・五八	

(乙) 畑作の場合

1. 南滿地方に於ける場合

家族、傭人關係、水田の場合と同様、四町を耕作する場合の收支

(イ) 收入	大豆	八反	一九八〇	九四〇	一八六・三	
	高粱	五反	八〇〇	七三〇	六八四〇	
	玉蜀黍	五反	六〇〇	八四〇	五〇四〇	
	小麦	二反	一六〇	六六〇	三九六〇	
	馬鈴薯	二反	六〇〇	九九〇	一五八四	
	高粱	(八)	二四〇〇斤	七〇〇	三〇〇〇	單位千斤
	高粱	(五)	五〇〇車	〇〇五	一六八〇	
副業收入					七五〇	
役畜收入					三五〇〇	
合計					二八〇〇	
(ロ) 支出					四七六六	
A、營農費						
種子代					一〇二・〇四	
農具費					一八・三二	
其他					八・〇〇	
摘要						
總收量			四六七・六六			
單價						
金額						
備考						

飼料費	一八・二五
雇備費	三一・五〇
肥料代	二〇・〇〇
其他	六・〇〇
計	一〇二・〇四
B、家計費	二六二・二二
食料費	一五六・〇〇
被服費	一九・〇〇
光熱費	二七・〇〇
教育費	五・〇〇
税金	三一・二二
諸團體費	七・〇〇
借入金利息	一七・〇〇
計	二六二・二二
支出合計	三六四・二六
差引益金	一〇三・四〇
2. 北滿地方に於ける場合	
飼料費	一八・二五
雇備費	三一・五〇
肥料代	二〇・〇〇
其他	六・〇〇
計	一〇二・〇四
B、家計費	二六二・二二
食料費	一五六・〇〇
被服費	一九・〇〇
光熱費	二七・〇〇
教育費	五・〇〇
税金	三一・二二
諸團體費	七・〇〇
借入金利息	一七・〇〇
計	二六二・二二
支出合計	三六四・二六
差引益金	一〇三・四〇
借入金一七〇圓、年利一割二分、一〇箇月分	

家族、雇備關係同上、四町五反の耕作を爲す場合の收支

大豆	一八〇	八〇	一四四〇〇	備考
粟	一〇〇	六〇	六〇〇	
大麦	一〇	六〇	六〇	
小麦	一〇	六〇	六〇	
小麥	八	二〇	二〇	
玉蜀黍	三	五〇	一六〇	
馬鈴薯	三	〇〇	三〇	
小豆	二	八〇	二〇〇	單位千斤
粟	(10)	六〇	一八〇	
副業收入			三三〇	
役畜收入			三三〇	
計			四〇八〇	
(口) 支出			三三九・九二	
1. 營業費			八〇・〇一	
種子代			二〇・九一	
金額			四町五反分	
金額			二〇・九一	
金額			四町五反分	

農具費	八〇〇		
飼料費	一四・六〇		
雇傭費	三一・五〇	四五人分、單價七〇錢	
其他費	五〇〇	雜費	
計	八〇〇		
2. 家計費	二四九・九一		
食料費	一四四・〇〇	金額	摘要
被服費	二四・〇〇		
光熱費	二九・〇〇	器具、保健費を含む	
教育費	五・〇〇		
税金	二七・九一	地稅、地損、街村費其他	
諸團體費	五・〇〇		
借入金	一五・〇〇	借入金一五〇圓、年利一割二分、一〇箇月分	
計	二四九・九一		
支出合計	三二九・九二		
差引益金	七八・八八		

以上南滿、北滿の水田作及畑作の場合に於ける在滿鮮人農家の收支計算竝に利廻を概

括的に擧げて見れば左の通りである。

○在滿鮮人農家の收支集計表

	南滿	北滿	平均	收入	支出	差引益金	投資總額	利廻
水田作の場合	四七七〇	四七六〇	四七六五	三三〇四三	二七三六	一三三	一割二五	
畑作の場合	四七六	五〇一六〇	四七六	三六四六	一〇三四〇	二四〇	九分	
水田作の場合	五〇一六〇	三三〇四三	三三〇四三	一八四五六	一二五	一割五八		
畑作の場合	四八八〇	三三九三	三三九三	六八八	一二五	七分一厘		
平均	四三六四	三三九三	三三九三	二六〇四	一二六	一割一一		

右の表示に見れば北滿に於ける水田作が最も有利といふこととなつてゐる。

六、自家勞力に依る可能耕地面積

次に在滿鮮農が自家勞力のみを基準として果して幾何の耕地面積を耕作し得るか調べて見度い。(會社事業課調査)

(1) 調査標準地

- (イ) 水田に於ては通化省柳河縣三源浦農村附近
- (ロ) 畑に於ては奉天省興京縣永陵農場附近

共に會社經營の農村及農場であつて、何れも實績に基いて調査し、家族は夫妻と兒童三人の合計五人なるが、労働能力換算を一・五とする。

(2) 水田並畑の自家勞力耕作可能面積

水田に於ては 一町歩

畑に於ては 二町五反

(3) 右に基く鮮農の收支は次の如くなる。

○自家勞力可能面積耕作の收支

區 別	收 入		支 出		差引益金
	農業收入	副業收入	家計費	營農費	
水 田 (一町)	三六〇	三〇〇	二八八	七五三	三三三
畑 (二町五)	三九〇	六〇〇	三六八	四〇九	三三三
計	七五〇	九〇〇	六五六	一一六二	六三三

即ち水田作の收支状態を見るに其の純益金は二六圓四五であつて、副業収入の二二圓が無ければ純益は殆ど皆無に近く、辛じて一家を支へ得るといふ計算である。

畑作に於ては耕作面積が一倍半であるだけに、純益八五圓四五なるも、是れとても副業収入の六七圓を差引けば僅に一八圓四五であつて、矢張り漸く一家を支へ得るに過ぎ

ず、共に不慮の災害若くは家族に不幸等のある場合をも考慮に入れるなれば、決して堅實なる收支即ち安全なる耕地面積といふことは出来ない。

七、自作農創定可能最小耕地面積

然らば自家勞力を基準とし、最少限度の雇人をして安全なる收支を償ひ、而も建設費を償還し得て自作農たるに要する最小限度の耕地面積が幾何であるかを次に調べて見る

(會社事業課調査)

(1) 調査標準地

前項の場合と同一

(2) 水田並畑の自作農創定可能最小耕地面積

水田に於ては 二町四反

畑に於ては 四町五反

(3) 右に基く鮮農の收支及年賦償還計數は左の通りである。

(イ) 收支計算

○自作農創定可能最小限度收支表

區別	収入		支出		差引益金
	農産収入	副業収入	家計費	營農費	
水田 (二町四)	五三三・四〇	三三・〇〇	三〇一・九	二五・八九	三〇九・五三
畑 (四町五)	四六七・九	五三・〇〇	三三・四五	一〇二・七	三二五・二
(口) 年賦償還					二五五・六

區別	償還能力		償還年限		償還金額		差引残高
	建設費	償還能力	償還年限	償還金額	差引残高		
水田	一〇一・二〇〇	二〇・九三	八	一八九・六五	一九八・七		
畑	一〇八・八〇〇	二〇・五六	一〇	一七三・〇三	一八五・六		

右の耕地面積にして副業収入を見込まざる場合は償還年限を更に延長して、水田にありては一〇年、畑にありては一五年とするの要あり、之を表示すれば左の通りである。

(ハ) 副業収入を見込まざる場合の年賦償還

區別	建設費	償還能力	償還年限	償還金額	差引残高
水田	一〇一・二〇〇	一八・七三	一〇	一六四・六五	三三・七
畑	一〇八・八〇〇	一五・三六	一五	一四三・六	九六・二

八、在滿鮮農の擔稅力

次に在滿鮮農が上記の如き生産を見せ、上記の如き收支計算を示しつゝ、如何なる程度の納稅に堪え、滿洲國の財政に對して如何に寄與してゐるかを考察して見やう。

○在滿鮮人農家の標準的納稅額

滿洲國に於ける課稅率は省により、或は縣により必ずしも一定してゐないが、會社の事業課に於て建設の略ぼ完了せる吉林省地方在住鮮農に就き、その標準的稅金公課を調査せる處によれば左の通りである。

稅目	其他	金額	摘	要
地稅 (國稅)		四・二〇	農耕地不分等則响當	〇・六一五とし、六・六七
地捐 (縣稅)		八・二〇		
地費 (村附加稅)		八・二〇		
牛車稅		一・〇〇		
家屋稅		〇・九〇	賃貸價格年三〇圓とし、其の百分の三	
糶石稅		五・九八		
門戶費		三・〇〇		
義倉費		七・五〇	响當粟八升、五斗三四	
自衛團費		三・〇〇		

部落費	二〇〇
計	四三・八八

更に實際一、二、三の在滿鮮農部落に就て調べて見やう。

○間島省和龍縣德新村新明屯、鮮農二一戸の部落に於ける康徳四年度の實際納稅額は次の通りである。(間島省公署調査)

第一表	地稅(國稅)	九八・八一
	地捐(縣稅)	一九九・八九
	地費(附稅)	一二七・一七
計		四二五・二七 (二戸當平均二〇・二五)

第二表	村費	二五・〇〇
	車牌捐	二〇・〇〇
	車牌附加	一〇・〇〇
	農業合作者費	二二・九二
	義倉徵集費	四四・七三
計		一一一・六五 (二戸當平均 五・七九)
合計		五四六・九一 (二戸當平均二六・〇四)

即ち國稅及地方稅を通じて同屯の鮮農は一戸當二六圓〇四錢の租稅を負擔してゐる計

算である。

又奉天省鐵嶺縣下、會社の經營に係る鐵嶺安全農村、三八三戸の鮮農部落に於ける同年度の納稅額を擧げて見ると次の通りである。(會社經理課調査)

第一地	租	六、五四四
1.	田賦(國稅)	一、四一四
2.	畝捐(縣稅)	一、七九九
3.	村稅(警備、衛生等)	三、三三一
第二	糧石稅其他	六、七四〇
1.	出產稅	三、二九〇
2.	學校組合費	三、四五〇
合計		二三、二八四 (一戸當平均三八圓)

尙ほ康徳四年十二月一日(全面的治外法權撤廢の日)以前にあつては所謂朝鮮人民會なるものがあつて、之に要する經費毎戸平均四圓が掛つてゐたのであつて、右民會の解消を見た今日に於ても此種の經費は當然村稅に移行すべく、而も其の負擔額は決して従前

以下に低下せざる可しと信ぜられる。

従つて右鐵嶺農村に於ける鮮農各戸の總納税額は都合平均四二圓見當となり、前記和龍縣新明屯に於ける鮮農各戸の總納税額二六圓に比して九割以上多額の負擔となつてゐるが、其れは兩地間に文化の程度に相當な差異のある上に、其の作付面積が鐵嶺農村の一戸當二町三六に比して新明屯の其れが僅に一町二四に過ぎない當然の結果と見るべきである。

その他哈爾濱日本總領事館の調査に係る康德四年度管内居住鮮農の諸税金は平均二〇圓とあるから、彼れ是れ在滿鮮農一戸當の擔税力は大體二〇圓乃至四〇圓と見るを至當とすべく、在滿鮮人農家約二十萬戸の總納税額は相當の額に達して、従つて其れだけ滿洲國政府の中央乃至地方財政上に寄與しつゝある譯である。

九、鮮農の入植と治安

鮮農が新たに入植或は既住鮮農が一定の地域に統制集結せられて其處に集團部落を創設する場合、必然的に先づ其の地方の治安が確保せられてゐなくてはならぬ。即ち鮮農

の入植若くは集結の準備工作として、該地方の討匪其他一般治安の確保に就ては、地方軍警方面事前の容易ならぬ努力が拂はれるは勿論、入植集結後に就ても概ね開拓民部落の壯丁間に自警團の組織と其の訓練が施され、地方軍警の指導下に日夜必要なる警邏が續けられ、不逞の徒の出沒は其跡を斷つのであるから、鮮農の入植集結に由りて地方の治安は更に一段と確保の度が強化される。

先きにも例に擧げた間島省安圖、羅子溝及び奉天省旺清門の如き共に、匪賊屈竟の巢窟であつたが、鮮農の入植、集團部落設定以來殆ど匪影絶無となりて理想的な農耕地と化した。原住の滿農達も此の實際を見て今や鮮農の渡來を心より歓迎してゐる有様である。

一〇、在滿鮮農の思想的動向

滿洲事變前に於ける在滿鮮人の思想は概して芳しからぬものがあつた。即ち甚しきは共產主義者あり、或は民族主義に基く所謂獨立論者あり、左様な確固とした主義も主張もなく自暴自棄的な思想の持主も尠くなかつた。蓋し國家の保護をも受けず、却て舊東

北軍閥の壓制下に彷徨して歸從する處を知らなかつた在滿鮮人としては、動もすれば虚無的な放縱生活に沈淪して行くことも亦已むを得なかつたであらうと思はれる。勿論朝鮮總督府としては大に鑑みる處あり、これ等在滿鮮人の保護撫育に關し極力努めて來たのであつたが、舊東北軍閥の極端なる虐政下に在つては復た殆ど施す餘地さへなかつたのである。

然るに偶々滿洲事變の勃發に因りて滿洲國が新たに建國せられてからは、在滿鮮人も對外的に驟然覺醒すると共に、滿洲國內に在つても日本國民として一種の矜持をさへ持つて來て、日本帝國に對する信頼の念も亦非常に深くなつた。殊に今次の支那事變に際會して舉國一致の實情を見聞するや、鮮内の一般と共に在滿鮮人の間にも愛國の至誠が頓に迸り、會社の經營に係る鮮農部落民のみの國防献金でさへも昨年末現在 一二、二三五名に依つて 一三、五〇〇圓となり、在滿全鮮人に亘りては五十數萬圓、若し夫れ全鮮を通じては實に一千萬圓近い數字を示してゐる。

殊に上記會社經營鮮農部落の献金者中には、もと共匪から歸順營農せる鮮人も含まれてゐるのみならず、却て彼等が率先道路開修等に勞働奉仕して獲た賃銀を献金、一般鮮

農に範を示したが如き、又昨年靜岡市の大火災に對し哈爾濱附近在住の鮮農達が義捐金を集めて、その送金方を省公署に願出でたる事實の如きと共に、特筆に値し、孰れも當局を感激せしめてゐる。

即ち日本帝國の大陸發展が、聽て朝鮮民族の伸展にも必要である所以を意識して、今や朝鮮民族は大和民族の指導誘掖下に、大に滿蒙の地に飛躍せんとの意氣に燃えて來たと見ることが出来る。又最近朝鮮に對する志願兵制度の創定と云ひ、教育制度の劃期的改正と云ひ、更に最近には氏制の創定と云ひ、日本政府の朝鮮に對する施政の革新が、延いて在滿鮮人に對しても好印象を與へたことは想像以上のものがあり、矢張り一昨々年來入植鮮農に對する滿洲國政府の政策方針が逐年優遇的に改訂せられて來た事も亦彼等の心境を明朗化する上に大に役立つた。

従つて地元の滿農と新入植の鮮農との關係も、事變前には其の融和狀況甚だ面白からぬものがあり、更に事變直後にあつては却て反動的に、鮮農の方が空威張りを敢てしたやうな事もないでは無かつたが、最近に於ては全く好轉して相互間に何等憂ふべき素因もなく、一方治安の確立に伴ひ一般行政事務も整備せられ、諸事業も漸次好調を示すや

うになるや、滿鮮人の接近は益々緊密となり、地元住民から漸く歡待せらるゝの實情となつて來た。

一一、在滿鮮農の將來と其の使命

滿洲國の農業をして從來の如き傳統的な掠奪粗笨農業から、近代的集約農業の水準に迄引上げるとは、大和民族及朝鮮民族に課せられた重大使命でなければならぬ。

殊に朝鮮農民は前にも記した通り、その風土の朝鮮と似た滿洲に於ける水稻作に就ては、瑞穂の國の大和民族さへも鮮農に對して一籌を輸してをり、況や滿農に至つては鮮農の足許にも寄れぬ實情である。

處が鮮農が現に滿洲に於て水田を耕作してゐる地域と云へば、國境の鴨綠江及圖們江の上流地方から滿洲の中央に向ふ地方、竝に遼河及松花江の河畔若干位なものであつて、耕地面積にして二十數萬町歩に過ぎないのであるが、全滿を通じて水田の有望な適地としては、新京、奉天、撫順、安東、開原、松樹、海城、營口の諸地方と稱せられ、將來は遼河、松花江、牡丹江、穆稜河、嫩江、太子河及漂河等の各流域には開田せられるも

のが漸次増加するであらうと期待される。

而して滿洲國の既耕地は一七、三八二、六〇〇町であり、可耕未墾地は大約一七、〇〇〇、〇〇〇町歩であると觀られ、後者に對する開田開發乃至改良を事業目的とする特殊會社滿洲土地開發株式會社が康徳六年八月に設立せられて、初年度は一〇萬町歩、第二年度は二〇萬町歩、第三年度以降は四〇萬町歩宛を開發する計畫になつてゐる。而も同會社は開田即ち水田の開拓に對しても充分なる關心を拂ひつつありて、畑地に對する比率を〇・三乃至〇・四に置かん意圖の如くであるから、人的物的資材にして豫定通りに取得し得れば數年を出でずして可耕水田は新たに十數萬町歩も造成せられる筈である。

然らば上記可耕未墾地大約一千七百萬町歩の内に可耕水田面積は果して幾何あるであらうか。

往年日本大使館の調査によれば僅に三十五萬町歩とあつたが、其後専門家の調査にては或は七、八十萬町歩と云ひ、最近にては優に尙ほ百萬町歩は開田し得るとまで主張する者が現はれ、殊に滿洲に於ける農政の權威小平權一氏の如きは、經費をさへ惜まなければ滿洲に尙ほ三百萬町歩以上の水田が期待せられるとまで公言されてゐる。

滿洲國政府の方針も現在の水田約三十萬町の外に、濕地或はアルカリ地帯の干拓或は改良によりて、水田の大造成を企圖し、米穀の生産高を、國內に於ける消費高數百萬玄米石を差引き一千萬石の生産餘剩米を日本に輸出して以て、日滿支を通ずる糧穀確保に寄與せんことを期してゐるから、今後更に少くとも百數十萬町位の造成水田が得られると見るも決して過大であるまい。假に現在の三十萬町を併せ將來百七十萬町の水田が造成されるとすれば、日本内地の水稲作付面積約三百萬町の二分の一以上、朝鮮の水田百七十萬町と同量となるから、將來鮮農が更に五十萬戸、二百五十萬人が入植するとしても彼等が水田耕作上、耕地に行詰るやうな懸念はない。

況や鮮農は概して素朴純眞であり、且つ困苦缺乏に堪えて、水田ばかりでなく畑作に於ても同時に相當な成績を擧げて來てゐるのであるから、滿洲に於ける鮮農の將來は實に洋々たりと謂ふべきである。

之を要するに在滿朝鮮人は、滿洲國の重要な一構成分子であると同時に、日本人の同胞であるとの自覺の下に、即ち上記二重の責任を意識し、他の諸民族とも協同融和して以て、滿洲國の興隆發展に寄與すべき權利と義務とがある譯であり、且つ聽ては其れ

が東亞共榮圈の確立に貢獻する以所ともなるのである。

附 録	小 計	後 穆 稜 土 地	柳 毛 河	平 安 屯	泉 榮 屯	猴 石 屯	鐘 山 屯	向 陽 屯	普 興 屯	福 來 屯	福 屯	計	計	計	計	計	計	計	計	計
牡丹江	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
牡丹江	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
牡丹江	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
合 計	小	計	計	計	計	計	計	計	計	計	計	計	計	計	計	計	計	計	計	計
	一八三	一八三	一八三	一八三	一八三	一八三	一八三	一八三	一八三	一八三	一八三	一八三	一八三	一八三	一八三	一八三	一八三	一八三	一八三	一八三
	八八五三四	八八五三四	八八五三四	八八五三四	八八五三四	八八五三四	八八五三四	八八五三四	八八五三四	八八五三四	八八五三四	八八五三四	八八五三四	八八五三四	八八五三四	八八五三四	八八五三四	八八五三四	八八五三四	八八五三四
	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六
	三五七〇	三五七〇	三五七〇	三五七〇	三五七〇	三五七〇	三五七〇	三五七〇	三五七〇	三五七〇	三五七〇	三五七〇	三五七〇	三五七〇	三五七〇	三五七〇	三五七〇	三五七〇	三五七〇	三五七〇
	九八八五	九八八五	九八八五	九八八五	九八八五	九八八五	九八八五	九八八五	九八八五	九八八五	九八八五	九八八五	九八八五	九八八五	九八八五	九八八五	九八八五	九八八五	九八八五	九八八五
	一一〇〇	一一〇〇	一一〇〇	一一〇〇	一一〇〇	一一〇〇	一一〇〇	一一〇〇	一一〇〇	一一〇〇	一一〇〇	一一〇〇	一一〇〇	一一〇〇	一一〇〇	一一〇〇	一一〇〇	一一〇〇	一一〇〇	一一〇〇
	九〇〇	九〇〇	九〇〇	九〇〇	九〇〇	九〇〇	九〇〇	九〇〇	九〇〇	九〇〇	九〇〇	九〇〇	九〇〇	九〇〇	九〇〇	九〇〇	九〇〇	九〇〇	九〇〇	九〇〇
	二〇〇〇	二〇〇〇	二〇〇〇	二〇〇〇	二〇〇〇	二〇〇〇	二〇〇〇	二〇〇〇	二〇〇〇	二〇〇〇	二〇〇〇	二〇〇〇	二〇〇〇	二〇〇〇	二〇〇〇	二〇〇〇	二〇〇〇	二〇〇〇	二〇〇〇	二〇〇〇
	一四〇〇	一四〇〇	一四〇〇	一四〇〇	一四〇〇	一四〇〇	一四〇〇	一四〇〇	一四〇〇	一四〇〇	一四〇〇	一四〇〇	一四〇〇	一四〇〇	一四〇〇	一四〇〇	一四〇〇	一四〇〇	一四〇〇	一四〇〇
	三七五〇	三七五〇	三七五〇	三七五〇	三七五〇	三七五〇	三七五〇	三七五〇	三七五〇	三七五〇	三七五〇	三七五〇	三七五〇	三七五〇	三七五〇	三七五〇	三七五〇	三七五〇	三七五〇	三七五〇
	二七五	二七五	二七五	二七五	二七五	二七五	二七五	二七五	二七五	二七五	二七五	二七五	二七五	二七五	二七五	二七五	二七五	二七五	二七五	二七五
	三六三三	三六三三	三六三三	三六三三	三六三三	三六三三	三六三三	三六三三	三六三三	三六三三	三六三三	三六三三	三六三三	三六三三	三六三三	三六三三	三六三三	三六三三	三六三三	三六三三
	一三四八美	一三四八美	一三四八美	一三四八美	一三四八美	一三四八美	一三四八美	一三四八美	一三四八美	一三四八美	一三四八美	一三四八美	一三四八美	一三四八美	一三四八美	一三四八美	一三四八美	一三四八美	一三四八美	一三四八美
	二七八九四	二七八九四	二七八九四	二七八九四	二七八九四	二七八九四	二七八九四	二七八九四	二七八九四	二七八九四	二七八九四	二七八九四	二七八九四	二七八九四	二七八九四	二七八九四	二七八九四	二七八九四	二七八九四	二七八九四
	二七五	二七五	二七五	二七五	二七五	二七五	二七五	二七五	二七五	二七五	二七五	二七五	二七五	二七五	二七五	二七五	二七五	二七五	二七五	二七五
	八〇五	八〇五	八〇五	八〇五	八〇五	八〇五	八〇五	八〇五	八〇五	八〇五	八〇五	八〇五	八〇五	八〇五	八〇五	八〇五	八〇五	八〇五	八〇五	八〇五
	四、六八一	四、六八一	四、六八一	四、六八一	四、六八一	四、六八一	四、六八一	四、六八一	四、六八一	四、六八一	四、六八一	四、六八一	四、六八一	四、六八一	四、六八一	四、六八一	四、六八一	四、六八一	四、六八一	四、六八一
	四六、一二〇	四六、一二〇	四六、一二〇	四六、一二〇	四六、一二〇	四六、一二〇	四六、一二〇	四六、一二〇	四六、一二〇	四六、一二〇	四六、一二〇	四六、一二〇	四六、一二〇	四六、一二〇	四六、一二〇	四六、一二〇	四六、一二〇	四六、一二〇	四六、一二〇	四六、一二〇
	三一〇、二九八	三一〇、二九八	三一〇、二九八	三一〇、二九八	三一〇、二九八	三一〇、二九八	三一〇、二九八	三一〇、二九八	三一〇、二九八	三一〇、二九八	三一〇、二九八	三一〇、二九八	三一〇、二九八	三一〇、二九八	三一〇、二九八	三一〇、二九八	三一〇、二九八	三一〇、二九八	三一〇、二九八	三一〇、二九八
	五、六〇六	五、六〇六	五、六〇六	五、六〇六	五、六〇六	五、六〇六	五、六〇六	五、六〇六	五、六〇六	五、六〇六	五、六〇六	五、六〇六	五、六〇六	五、六〇六	五、六〇六	五、六〇六	五、六〇六	五、六〇六	五、六〇六	五、六〇六

(註) 左記三種の開拓民は現に會社に於て取扱つてゐるが右の表に含まれてゐない。

- (1) 政府撥集合同拓鮮農 戸數 八〇五 (第四章第一、参照)
- (2) 前金融會扱同上 八七九 (同)
- (3) 金融自作農 九、二二四 (同 第三、参照)
- 計 一〇、二九八

第二、鮮滿拓殖株式會社令

鮮滿拓殖株式會社令 (昭和一一) (制令七)

第一章 總 則

- 第一條 鮮滿拓殖株式會社ハ西北鮮ニ於ケル朝鮮人移住者ノ爲必要ナル拓殖事業ノ經營及滿洲國ニ於ケル朝鮮人移住者ノ爲必要ナル拓殖事業ニ對スル資金ノ供給ヲ爲スヲ目的トスル株式會社トシ其ノ本社ヲ京城ニ置ク
- 第二條 鮮滿拓殖株式會社ノ資本ハ二千萬圓トス但シ朝鮮總督ノ認可ヲ受ケ之ヲ増加スルコトヲ得
- 第三條 鮮滿拓殖株式會社ハ株金全額拂入前ト雖モ其ノ資本ヲ増加スルコトヲ得
- 第四條 鮮滿拓殖株式會社ノ株券ハ記名式トシ帝國臣民、帝國法令ニ依リ設立シタル法人、滿洲國人又ハ滿洲國法令ニ依リ設立シタル法人ニ限り之ヲ所有スルコトヲ得
- 第五條 鮮滿拓殖株式會社ノ存立期間ハ設立登記ノ日ヨリ三十年トス但シ朝鮮總督ノ認可ヲ受ケ之ヲ延長スルコトヲ得

第二章 役 員

第六條 鮮滿拓殖株式會社ニ總裁一人、理事三人以上及監事二人以上ヲ置ク

第七條 總裁ハ鮮滿拓殖株式會社ヲ代表シ其ノ業務ヲ總理ス

總裁事故アルトキハ定款ノ定ムル所ニ從ヒ理事中一人其ノ職務ヲ代理シ總裁缺員ノトキハ其ノ職務ヲ行フ

理事ハ總裁ヲ補助シ鮮滿拓殖株式會社ノ業務ヲ分掌ス

監事ハ鮮滿拓殖株式會社ノ業務ヲ監査ス

第八條 總裁ハ朝鮮總督之ヲ命ジ其ノ任期ヲ五年トス

理事ハ五十株以上ヲ有スル株主中ヨリ株主總會ニ於テ二倍ノ候補者ヲ選舉シ朝鮮總督其ノ中ヨリ之ヲ命ジ其ノ任期ヲ四年トス

監事ハ三十株以上ヲ有スル株主中ヨリ株主總會ニ於テ之ヲ選任シ其ノ任期ヲ二年トス

第九條 總裁及理事ハ他ノ職務又ハ商業ニ従事スルコトヲ得ズ但シ朝鮮總督ノ認可ヲ受ケタルトキハ此ノ限ニ在ラズ

第三章 營 業

第十條 鮮滿拓殖株式會社ハ左ノ業務ヲ營ムモノトス

- 一 西北鮮ニ於ケル朝鮮人移住者ノ爲必要ナル土地ノ取得、經營及處分
- 二 西北鮮ニ於ケル朝鮮人移住者ノ爲必要ナル資金ノ貸付
- 三 西北鮮ニ於ケル朝鮮人移住者ノ爲必要ナル建築物ノ築造、賣買及貸借
- 四 西北鮮ニ於ケル朝鮮人移住者ノ爲必要ナル土地ノ委託ニ依ル經營及管理
- 五 其ノ他西北鮮ニ於ケル朝鮮人移住者ノ爲必要ナル事業
- 六 滿洲國ニ於ケル朝鮮人移住者ノ爲必要ナル拓殖事業ヲ營ムコトヲ目的トスル會社ノ株式ノ引受及事業資金ノ貸付

前項第五號又ハ第六號ノ業務ヲ營マントスルトキハ豫メ朝鮮總督ノ認可ヲ受ケベシ

第十一條 前條第一項第一號ノ土地ノ處分ノ方法及同項第二號ノ資金ノ貸付ノ方法ハ朝鮮總督ノ認可ヲ受ケベシ

第十二條 營業上ノ餘裕金ハ國債證券、地方債證券若ハ朝鮮總督ノ認可ヲ受ケタル有價證券ノ應募、引受若ハ買入ヲ爲シ又ハ朝鮮總督ノ指定シタル銀行ニ預入ヲ爲スノ外之ヲ使用スルコトヲ得ズ

第四章 鮮滿拓殖債券

第十三條 鮮滿拓殖株式會社ハ拂込ミタル株金額ノ三倍ヲ限り鮮滿拓殖債券ヲ發行スルコトヲ得

鮮滿拓殖債券ヲ發行スル場合ニ於テハ朝鮮民事令ニ於テ依ルコトヲ定メタル商法第二百九條ニ定ムル決議ニ依ルコトヲ要セズ

社債ヲ發行スル場合ニ於テ應募總額ガ社債申込證ニ記載シタル社債總額ニ達セザルトキト雖モ社債ヲ成立セシムル旨ヲ社債申込證ニ記載シタルトキハ其ノ應募總額ヲ以テ社債總額トス

第十四條 鮮滿拓殖債券ヲ發行セントスルトキハ毎回其ノ金額、條件並ニ發行及償還ノ方法ヲ定メ朝鮮總督ノ認可ヲ受クベシ

第十五條 鮮滿拓殖債券ハ券面金額十圓以上トシ無記名式利札附トス但シ應募者又ハ所有者ノ請求ニ因リ記名式ト爲スコトヲ得

第十六條 券面金額二十圓以下ノ鮮滿拓殖債券ヲ發行スル場合ニ於テハ賣出ノ方法ニ依ルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ賣出期間ヲ定ムルコトヲ要ス

前項ノ場合ニ於テハ社債申込證ヲ作ルコトヲ要セズ

第一項ノ規定ニ依リ發行スル鮮滿拓殖債券ニハ商號並ニ朝鮮民事令ニ於テ依ルコトヲ定メタル商法第七十三條第二號及第四號乃至第六號ニ掲グル事項ヲ記載スルコトヲ要ス朝鮮民事令ニ於テ依ルコトヲ定メタル商法第二百四條ノ三第一項ノ期間ハ鮮滿拓殖債券ノ賣出期間満了ノ日ヨリ之ヲ起算シ其ノ登記スベキ事項ハ賣出期間内ニ於ケル鮮滿拓殖債券ノ賣上總額及朝鮮民事令ニ於テ依ルコトヲ定メタル商法第七十三條第四號乃至第六號ニ掲グル事項トス

賣出ノ方法ニ依リ鮮滿拓殖債券ヲ發行シタル場合ニ於ケル社債ノ登記ノ申請書ニハ賣出期間内ニ於ケル鮮滿拓殖債券ノ賣上總額ヲ證スル書面ヲ添附スルコトヲ要ス

第十七條 賣出ノ方法ニ依リ鮮滿拓殖債券ヲ發行セントスルトキハ賣出期間及朝鮮民事令ニ於テ依ルコトヲ定メタル商法第二百三條第二項第一號乃至第三號ニ掲グル事項ヲ公告スベシ

第十八條 鮮滿拓殖債券ノ所有者ハ鮮滿拓殖株式會社ノ財産ニ付他ノ債權者ニ先達チテ自己ノ債權ノ辨濟ヲ受クル權利ヲ有ス

第十九條 鮮滿拓殖債券ノ消滅時効ハ元金ニ在リテハ十五年、利子ニ在リテハ五年ヲ以テ完成ス

第二十條 鮮滿拓殖株式會社ハ社債借替ノ爲一時第十三條第一項ノ制限ニ依ラズ鮮滿拓殖債券ヲ發行スルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ發行後一月以内ニ其ノ社債總額ニ相當スル舊鮮滿拓殖債券ヲ償還スベシ

第二十一條 鮮滿拓殖株式會社ハ朝鮮總督ノ認可ヲ受ケ鮮滿拓殖債券ノ買入償却ヲ爲スコトヲ得

第二十二條 鮮滿拓殖債券ノ模造ニ關シテハ朝鮮刑事令ニ於テ依ルコトヲ定メタル通貨及證券模造取締法ヲ準用ス

第五章 監 督

第二十三條 朝鮮總督ハ鮮滿拓殖株式會社ノ業務ヲ監督ス

第二十四條 鮮滿拓殖株式會社借入金ヲ爲サントスルトキハ朝鮮總督ノ認可ヲ受クベシ

第二十五條 定款ノ變更、合併及解散ノ決議ハ朝鮮總督ノ認可ヲ受クルニ非ザレバ其ノ效力ヲ生ゼズ

第二十六條 鮮滿拓殖株式會社ハ朝鮮總督ノ認可ヲ受クルニ非ザレバ利益金ノ處分ヲ爲スコトヲ得ズ

第二十七條 朝鮮總督ハ鮮滿拓殖株式會社ノ業務ニ關シ監督上必要ナル命令ヲ爲スコトヲ得

第二十八條 朝鮮總督ハ鮮滿拓殖株式會社監理官ヲ置キ鮮滿拓殖株式會社ノ業務ヲ監視セシム

第二十九條 鮮滿拓殖株式會社監理官ハ何時ニテモ鮮滿拓殖株式會社ノ金庫、帳簿及諸般ノ文書物件ヲ検査スルコトヲ得

鮮滿拓殖株式會社監理官ハ必要ト認ムルトキハ何時ニテモ鮮滿拓殖株式會社ニ命ジ業務ニ關スル諸般ノ計算及狀況ヲ報告セシムルコトヲ得

鮮滿拓殖株式會社監理官ハ株主總會其ノ他諸般ノ會議ニ出席シ意見ヲ陳述スルコトヲ得

第三十條 朝鮮總督ハ鮮滿拓殖株式會社ノ決議又ハ役員ノ行爲ガ法令、法令ニ基キテ爲ス處分若ハ定款ニ違反シ又ハ公益ヲ害スト認ムルトキハ其ノ決議ヲ取消シ又ハ役員ヲ

解任スルコトヲ得

第六章 罰 則

第三十一條 鮮滿拓殖株式會社左ノ各號ノ一ニ該當スルトキハ總裁又ハ總裁ノ職務ヲ行ヒ若ハ代理スル理事ヲ百圓以上二千圓以下ノ過料ニ處ス理事ノ分掌業務ニ係ルトキハ理事ヲ過料ニ處スルコト亦同ジ

- 一 本令ニ依リ認可ヲ受クベキ場合ニ於テ其ノ認可ヲ受ケザルトキ
 - 二 第十條第一項ノ規定ニ依ラズシテ業務ヲ營ミタルトキ
 - 三 第十二條ノ規定ニ違反シ營業上ノ餘裕金ヲ使用シタルトキ
 - 四 第十三條第一項ノ規定ニ違反シ鮮滿拓殖債券ヲ發行シタルトキ
 - 五 第二十條ノ規定ニ違反シ鮮滿拓殖債券ノ償還ヲ爲サザルトキ
 - 六 第二十七條ノ規定ニ基キテ爲シタル命令ニ違反シタルトキ
- 第三十二條 鮮滿拓殖株式會社ノ總裁又ハ理事第十條ノ規定ニ違反シタルトキハ二十圓以上二百圓以下ノ過料ニ處ス
- 第三十三條 朝鮮民事令ニ於テ依ルコトヲ定メタル非訟事件手續法第二百六條乃至第二

百八條ノ規定ハ前二條ノ過料ニ之ヲ準用ス

附 則

第三十四條 本令施行ノ期日ハ朝鮮總督之ヲ定ム(昭和十一年六月十八日ヨリ施行)

第三十五條 朝鮮總督ハ設立委員ヲ命ジ鮮滿拓殖株式會社ノ設立ニ關スル一切ノ事務ヲ處理セシム

第三十六條 設立委員ハ定款ヲ作成シ朝鮮總督ノ認可ヲ受ケタル後株主ヲ募集スベシ

第三十七條 株式申込證ニハ定款認可ノ年月日並ニ朝鮮民事令ニ於テ依ルコトヲ定メタル商法第二百六條第二項第二號、第四號及第五號ニ規定スル事項ヲ記載スベシ

第三十八條 設立委員ハ株主ノ募集ヲ終リタルトキハ株式申込證ヲ朝鮮總督ニ提出シ其ノ検査ヲ受クベシ

第三十九條 設立委員ハ前條ノ検査ヲ受ケタル後遲滯ナク各株ニ付第一回ノ拂込ヲ爲サシムベシ

前項ノ拂込アリタルトキハ設立委員ハ遲滯ナク創立總會ヲ召集スベシ

第四十條 創立總會終結シタルトキハ設立委員ハ其ノ事務ヲ鮮滿拓殖株式會社總裁ニ引

渡スベシ

第四十一條 設立初度ノ理事ハ五十株以上ヲ有スル株主中ヨリ、設立初度ノ監事ハ三十株以上ヲ有スル株主中ヨリ朝鮮總督之ヲ命ジ任期ハ理事ニ在リテハ四年、監事ニ在リテハ二年トス

第四十二條 朝鮮登録稅令第三條第一項第八號中「朝鮮殖産債券」ノ下ニ「及鮮滿拓殖債券」ヲ加フ

第三、鮮滿拓殖株式會社定款

鮮滿拓殖株式會社定款

第一章 總 則

第一條 本會社ハ鮮滿拓殖株式會社令ニ依リ設立シ鮮滿拓殖株式會社ト稱ス

第二條 本會社ハ鮮滿拓殖株式會社令ニ依リ營業ヲ爲スヲ以テ目的トス

第三條 本會社ハ本社ヲ京城ニ置ク

第四條 本會社ハ朝鮮總督ノ認可ヲ受ケ必要ノ地ニ支社ヲ設置スルコトアルベシ

第五條 本會社ノ存立期間ハ設立登記ノ日ヨリ三十年トス但シ朝鮮總督ノ認可ヲ受ケ之ヲ延長スルコトアルベシ

第六條 本會社ノ公告ハ朝鮮總督府官報及新聞紙ヲ以テ之ヲ爲ス但シ公告スベキ新聞紙ハ總裁之ヲ選定シ朝鮮總督府官報ヲ以テ公告スベシ

第二章 資本及株式

第七條 本會社ノ資本ハ二千萬圓トシ之ヲ四十萬株ニ分チ一株ノ金額ヲ五十圓トス但シ朝鮮總督ノ認可ヲ受ケ資本ヲ増加スルコトアルベシ

第八條 本會社ノ資本増加ハ株金全額ノ拂込アルコトヲ要セズ

第九條 本會社ノ株券ハ記名式トシ帝國臣民、帝國法令ニ依リ設立シタル法人、滿洲國人又ハ滿洲國法令ニ依リ設立シタル法人ニ限り之ヲ所有スルコトヲ得

第十條 本會社ノ株券ハ一株券、十株券、百株券及千株券ノ四種トス

第十一條 株金第一回ノ拂込金額ハ一株ニ付二十圓トス但シ増加資本ノ株金第一回ノ拂

込金額ハ一株ニ付十二圓五十錢トス

第十二條 株金第二回以後ノ拂込ノ期日、方法及金額ハ營業上ノ必要ニ依リ總裁之ヲ定メ少クトモ拂込ノ期日ヨリ三十日前ニ其ノ旨ヲ各株主ニ催告シ同時ニ之ヲ公告スベシ
株金第二回以後ノ拂込金額ハ毎回一株ニ付二十圓ヨリ多カラザルモノトス但シ増加資本ノ株金第二回以後ノ拂込金額ハ毎回一株ニ付十二圓五十錢ヨリ多カラザルモノトス
第十三條 株主株金ノ拂込ヲ怠リタルトキハ其ノ拂込期日ノ翌日ヨリ現ニ拂込アリタル日迄拂込滯納金ニ對シ百圓ニ付一日四錢ノ割合ニ依ル延滞利息ヲ徴スベシ
第十四條 株主及其ノ法定代理人ハ印鑑及住所ヲ本會社ニ届出ヅベシ之ヲ變更シタルト

キ亦同ジ

前項ノ場合ニ於テハ本會社ヨリ印鑑又ハ法定代理人ノ權限ニ付其ノ正當ナルコトヲ證明スベキ資料ノ提出ヲ請求スルコトアルベシ

第十五條 株券ノ名義書換ヲ爲サントスルトキハ本會社所定ノ名義書換請求書ニ株券ヲ添ヘ之ヲ本會社ニ提出スベシ

前項ノ場合ニ於テハ本會社ヨリ其ノ株券ノ取得原因ヲ證明スベキ書類ノ提出ヲ請求ス

ルコトアルベシ

第十六條 株券ノ喪失ニ因リ株券ノ再交付ヲ求ムル株主ハ株券喪失ノ事由竝ニ喪失シタル株券ノ種類及番號ヲ詳記シ且本會社ノ適當ト認ムル二人以上ノ保證人ノ連署シタル請求書ヲ本會社ニ提出スベシ

前項ノ請求アリタルトキハ本會社ハ請求株主ノ費用ヲ以テ其ノ旨ヲ公告シ公告後三十日ヲ經過スルモ株券ヲ發見セズ且異議ヲ申出ヅル者ナキトキニ限り喪失シタル株券ニ代ヘ新株券ヲ請求株主ニ交付スルモノトス

第十七條 株券ノ毀損又ハ汚損ノ爲株券ノ再交付ヲ求ムル株主ハ毀損又ハ汚損ノ事由ヲ詳記シタル請求書ニ株券ヲ添ヘ本會社ニ提出スベシ

前項ノ請求アリタルトキハ本會社ハ其ノ株券ヲ審査シ眞正ナルコトヲ鑑別シ難キ場合ニ於テハ喪失ノ例ニ依ル

第十八條 株券ノ種類ヲ變更セントスル株主ハ請求書ニ株券ヲ添ヘ本會社ニ提出スベシ
第十九條 本會社ハ株券ノ名義書換ノ場合ニ在リテハ株券一枚ニ付十錢、新株券交付ノ場合ニ在リテハ株券一枚ニ付三十錢ノ手数料ヲ請求株主ヨリ徴スベシ

第二十條 本會社ハ定時株主總會ノ期日前三十日以内株券ノ名義書換ヲ停止ス但シ此ノ場合ニ於テハ豫メ其ノ旨ヲ公告スベシ

前項ノ規定ハ之ヲ臨時株主總會ノ場合ニ準用スルコトヲ得

第三章 株 主 總 會

第二十一條 株主總會ハ定時及臨時ノ二種トス

定時株主總會ハ毎年決算期日後六十日以内ニ總裁之ヲ招集ス

臨時株主總會ハ左ノ場合ニ總裁之ヲ招集ス

- 一 總裁ニ於テ必要ト認ムルトキ
 - 二 監事ノ全員又ハ資本ノ五分ノ一以上ニ當ル株主ヨリ總會ノ目的タル事項及其ノ招集ノ理由ヲ記載シタル書面ヲ提出シテ其ノ招集ヲ請求シタルトキ
- 前項第二號ノ請求ヲ受ケタルトキハ總裁ハ十四日以内ニ之ガ招集ノ手續ヲ爲スコトヲ要ス

第二十二條 總會ヲ招集スルニハ其ノ日時、場所及會議ノ目的タル事項ヲ記載シタル通

知書ヲ少クトモ招集ノ期日ヨリ十四日前ニ各株主ニ發送スベシ

第二十三條 總會ノ議長ノ職務ハ總裁之ヲ行フ

第二十四條 株主ノ議決權ハ其ノ所有株數一株ニ付一箇トス

第二十五條 株主ガ代理人ヲシテ議決權ヲ行使セシメントスルトキハ其ノ代理人ハ本會社ノ株主タルコトヲ要ス但シ本會社ノ役員及用人ハ法定代理人タル場合ノ外之ヲ代理人ト爲スコトヲ得ズ

前項ノ代理人ハ其ノ代理權ヲ證明スベキ委任狀ヲ本會社ニ提出スベシ

第二十六條 株主總會ノ決議ハ法令ニ別段ノ定アル場合ヲ除クノ外出席株主ノ議決權ノ過半數ヲ以テ之ヲ爲ス可同數ナルトキハ議長ノ決スル所ニ依ル

第二十七條 株主總會ニ於テ決議シタル事項ハ之ヲ決議録ニ記載シ議長及出席シタル株主二人以上之ニ記名捺印スベシ

第四章 役 員

第二十八條 本會社ニ總裁一人、理事三人以上及監事二人以上ヲ置ク

第二十九條 總裁ハ本會社ヲ代表シ其ノ業務ヲ總理ス

總裁事故アルトキハ監督官廳ノ指定シタル理事其ノ職務ヲ代理シ總裁缺員ノトキハ其ノ職務ヲ行フ

理事ハ總裁ヲ補助シ本會社ノ業務ヲ分掌ス

監事ハ本會社ノ業務ヲ監査ス

第三十條 總裁ハ朝鮮總督之ヲ命ジ其ノ任期ヲ五年トス

理事ハ五十株以上ヲ有スル株主中ヨリ株主總會ニ於テ二倍ノ候補者ヲ選舉シ朝鮮總督其ノ中ヨリ之ヲ命ジ其ノ任期ヲ四年トス

監事ハ三十株以上ヲ有スル株主中ヨリ株主總會ニ於テ之ヲ選任シ其ノ任期ヲ二年トス理事又ハ監事ニ缺員アルキトハ株主總會ヲ召集シ補缺選舉ヲ行フベシ但シ朝鮮總督ノ認可ヲ受ケタルトキハ補缺選舉ハ次ノ株主總會迄之ヲ延期スルコトヲ得

第三十一條 理事ハ其ノ所有ニ係ル本會社ノ株券各五十株ヲ在任中監事ニ供託スベシ前項ノ株券ハ其ノ所有者タル理事退職スト雖モ其ノ年度ニ屬スル決算報告ガ株主總會ノ承認ヲ受ケタル後ニ非ザレバ之ヲ還付セズ

第三十二條 總裁及理事ハ朝鮮總督ノ認可ヲ受クルニ非ザレバ他ノ職務又ハ商業ニ從事

スルコトヲ得ズ

第三十三條 總裁及理事ノ報酬年額ハ左ノ如シ

一 總裁	一萬圓
二 理事	八千圓
	七千圓

監事ノ報酬額ハ株主總會ノ決議ヲ以テ之ヲ定ム

總裁及理事ニ對シテハ手當ヲ給スルコトヲ得其ノ額ハ朝鮮總督之ヲ定ム

第五章 役員會

第三十四條 役員會ハ總裁及理事ヲ以テ之ヲ組織ス

第三十五條 役員會ハ本會社ノ重要ナル業務ヲ議決ス

第三十六條 役員會ハ總裁之ヲ招集ス

役員會ハ役員半數以上出席スルニ非ザレバ之ヲ開クコトヲ得ズ但シ已ムヲ得ザル事故アリテ定數ニ滿タザルモ其ノ事ノ急施ヲ要スルトキハ出席役員ニ於テ之ヲ決議シ次ノ役員會ニ其ノ旨ヲ報告スベシ

議事ハ多數ヲ以テ之ヲ決ス可否同數ナルトキハ總裁之ヲ決ス

第三十七條 役員會ニ於テ決議シタル事項ハ之ヲ決議録ニ記載シ出席役員之ニ記名捺印スベシ

第六章 營 業

第三十八條 本會社ハ左ノ業務ヲ營ムモノトス

- 一 西北鮮ニ於ケル朝鮮人移住者ノ爲必要ナル土地ノ取得、經營及處分
 - 二 西北鮮ニ於ケル朝鮮人移住者ノ爲必要ナル資金ノ貸付
 - 三 西北鮮ニ於ケル朝鮮人移住者ノ爲必要ナル建築物ノ築造、賣買及貸借
 - 四 西北鮮ニ於ケル朝鮮人移住者ノ爲必要ナル土地ノ委託ニ依ル經營及管理
 - 五 其ノ他西北鮮ニ於ケル朝鮮人移住者ノ爲必要ナル事業
 - 六 滿洲國ニ於ケル朝鮮人移住者ノ爲必要ナル拓殖事業ヲ營ムコトヲ目的トスル會社ノ株式ノ引受及事業資金ノ貸付
- 前項第五號又ハ第六號ノ業務ヲ營マントスルトキハ豫メ朝鮮總督ノ認可ヲ受クルモノトス

第三十九條 前條第一項第一號ノ土地ノ處分ノ方法及同項第二號ノ資金ノ貸付ノ方法ハ

朝鮮總督ノ認可ヲ受クルモノトス

第四十條 本會社ノ營業上ノ餘裕金ハ國債證券、地方債證券若ハ朝鮮總督ノ認可ヲ受ケタル有價證券ノ應募、引受若ハ買入ヲ爲シ又ハ朝鮮總督ノ指定シタル銀行ニ預入ヲ爲スノ外之ヲ使用スルコトヲ得ザルモノトス

第四十一條 本會社ハ營業上必要アルトキハ朝鮮總督ノ認可ヲ受ケ借入金ヲ爲スコトヲ得ルモノトス

第七章 鮮滿拓殖債券

第四十二條 本會社ハ拂込ミタル株金額ノ三倍ヲ限リ鮮滿拓殖債券ヲ發行スルコトヲ得鮮滿拓殖債券ヲ發行スル場合ニ於テハ株主總會ノ決議ヲ要セザルモノトス

第四十三條 鮮滿拓殖債券ハ額面金額ヲ十圓以上トシ無記名式利札附トス但シ應募者又ハ所有者ノ請求ニ依リ記名式ト爲スベシ

第四十四條 鮮滿拓殖債券ヲ發行セントスルトキハ毎回其ノ金額、條件並ニ發行及償還ノ方法ヲ定メ朝鮮總督ノ認可ヲ受クルモノトス

第四十五條 本會社ハ社債借換ノ爲一時第四十二條第一項ノ制限ニ依ラズ鮮滿拓殖債券ヲ發行スルコトヲ得ルモノトス

前項ノ規定ニ依リ鮮滿拓殖債券ヲ發行シタル場合ニ於テハ發行後三十日以内ニ其ノ社債總額ニ相當スル舊鮮滿拓殖債券ヲ償還スベキモノトス

第四十六條 本會社ハ朝鮮總督ノ認可ヲ受ケ鮮滿拓殖債券ノ買入償却ヲ爲スコトアルベシ

第四十七條 第十六條及第十七條ノ規定ハ記名債券ニ之ヲ準用ス

第四十八條 本會社ハ記名債券ノ名義書換ノ場合ニ在リテハ債券一枚ニ付十錢、新債券交付ノ場合ニ在リテハ一枚ニ付三十錢ノ手数料ヲ請求人ヨリ徴スベシ

第八章 計 算

第四十九條 本會社ノ營業年度ハ毎年二月一日ニ始マリ翌年一月三十一日ニ終ルモノトス

第五十條 總裁ハ營業年度毎ニ財産目錄、貸借對照表、營業報告書、損益計算書及利益金處分案ヲ定時株主總會ニ提出シテ其ノ承認ヲ受クベシ

第五十一條 本會社ハ當該年度總益金ヨリ同年度總損金ヲ控除シタル殘額ニ朝鮮總督府補給金及前期繰越金ヲ加ヘタルモノヲ以テ利益トス

第五十二條 本會社ノ利益金ハ左ノ如ク之ヲ處分スルモノトス

- 一 法定積立金 利益金ノ百分ノ五以上
- 二 役員賞與金 利益金(前期繰越金ヲ控除シタルモノ)ノ百分ノ十以内
- 三 利益金ノ中ヨリ前二號ノ金額ヲ控除シタル殘額ハ之ヲ株主ニ配當シ又ハ特別積立金若ハ後期繰越金ト爲スモノトス

第五十三條 本會社ハ每營業年度ニ於ケル配當シ得ベキ利益金額ガ拂込ミタル株金額ニ對シ第三營業年度迄ニ在リテハ年百分ノ四、第四營業年度以降ニ在リテハ年百分ノ六ノ割合ニ達セザルトキハ第八營業年度迄之ニ達セシムル爲總額三百四十萬圓ヲ限度トスル補給金ヲ受クルモノトス但シ每營業年度ニ於ケル補給金額ハ拂込ミタル株金額ニ對シ年百分ノ六ノ割合ヲ超エザルモノトス

第五十四條 每營業年度ニ於ケル配當シ得ベキ利益金額ガ拂込ミタル株金額ニ對シ年百分ノ七ノ割合ヲ超ユルトキハ其ノ全額ヲ先ツ前條ノ補給金ノ償還ニ充ツルモノトス

第五十五條 第七營業年度迄ノ間ニ於テ前條ノ規定ニ依リ償還スベキ補給金ナキニ至リ且配當シ得ベキ利益金額ガ拂込株金額ニ對シ年百分ノ七ノ割合ヲ超ユルニ至リタルトキハ配當シ得ベキ利益金中年百分ノ七ヲ超エ年百分ノ九迄ノ金額ニ付テハ其ノ二分ノ一、年百分ノ九ヲ超ユル金額ニ付テハ其ノ全額ヲ配當準備ノ爲別ニ積立ツルモノトス

前項ノ規定ニ依ル積立金ハ後營業年度ニ於ケル補給金ノ計算ニ付テハ之ヲ配當シ得ベキ利益金ト看做スモノトス

第五十六條 本會社ハ朝鮮總督ノ認可ヲ受クルニ非ザレバ利益金ノ處分ヲ爲スコトヲ得ザルモノトス

第五十七條 利益金ノ配當ハ其ノ配當ヲ決議シタル株主總會當日ノ株主ニ之ヲ拂渡スモノトス

配當金拂渡ノ期日及場所ハ總裁之ヲ定メ株主ニ通知スベシ

附 則

第五十八條 本會社ノ設立ニ關スル一切ノ費用ハ本會社ニ於テ負擔スルモノトス但シ其

ノ金額ハ五萬圓ヲ限度トス

第五十九條 本會社設立初度ノ理事ハ五十株以上ヲ有スル株主中ヨリ、設立初度ノ監事ハ三十株以上ヲ有スル株主中ヨリ朝鮮總督之ヲ命ジ任期ハ理事ニ在リテハ四年、監事ニ在リテハ二年トス

第六十條 本會社ノ設立委員(第二章ニ記セルヲ以テ略ス)

第四、滿鮮拓植株式會社法 (康德三 改正康德四 康德五 康德七)
(勅令九七七號 勅令二四一 勅令一六二 勅令三二二)

第一條 政府ハ朝鮮人移住者ヲ統制シ且之カ安定ヲ圖ル爲滿鮮拓植株式會社ヲ設立セシム

第二條 滿鮮拓植株式會社ハ左ニ掲グル事業ヲ營ムモノトス

- 一 移住者ノ爲必要ナル土地ノ取得、經營及處分
- 二 移住者ノ爲必要ナル施設ノ經營
- 三 移住者ノ爲必要ナル資金ノ貸付
- 四 前各號ニ附帶スル事業

第三條 滿鮮拓植株式會社ハ本店ヲ新京ニ置ク

第四條 滿鮮拓植株式會社ノ資本ノ額ハ一千五百萬圓トス但シ興農部大臣ノ認可ヲ受ケ之ヲ増加スルコトヲ妨ケス

第五條 滿鮮拓植株式會社ノ存立期間ハ設立登記ノ日ヨリ三十年トス但シ興農部大臣ノ認可ヲ受ケ之ヲ延長スルコトヲ得

第六條 滿鮮拓植株式會社ノ株式ハ記名式トシ一株ノ金額ハ五十圓トス

第七條 滿鮮拓植株式會社ノ株式ハ會社ノ同意ヲ得ルニ非サレハ之ヲ他人ニ讓渡スルコトヲ得ス

第八條 滿鮮拓植株式會社ニ理事長一人理事五人以内監事三人以内ヲ置ク

理事長ハ會社ヲ代表シ其ノ業務ヲ綜理シ株主總會ノ議長トナル

理事長事故アルトキハ理事ノ一人其ノ職務ヲ行フ

理事ハ理事長ヲ輔佐シ會社ノ業務ヲ掌理ス

監事ハ會社ノ業務ヲ監査ス

第九條 理事長ハ政府之ヲ任命ス

理事及監事ハ株主總會ニ於テ株主中ヨリ之ヲ選任ス

理事長ノ任期ハ五年理事ノ任期ハ四年監事ノ任期ハ二年トス

第十條 理事長及理事ハ興農部大臣ノ許可ヲ受クルニ非サレハ他ノ業務ニ從事スルコトヲ得ス

第十一條 興農部大臣必要アリト認ムルトキハ何時ニテモ滿鮮拓植株式會社ニ命シテ其ノ業務若ハ財産ノ狀況ヲ報告セシメ又ハ所部ノ官吏ヲシテ其ノ金庫帳簿其ノ他諸般ノ文書物件ヲ検査セシムルコトヲ得

第十二條 興農部大臣ハ滿鮮拓植株式會社ノ業務ニ關シ監督上必要ナル命令ヲ爲スコトヲ得

第十三條 滿鮮拓植株式會社ハ營業年度毎ニ事業計畫及資金計畫ヲ定メ豫メ興農部大臣ノ認可ヲ受クヘシ

第十四條 理事及監事ノ選任及解任、定款ノ變更、利益金ノ處分、社債ノ募集並ニ合併及解散ノ決議ハ興農部大臣ノ認可ヲ受クルニ非サレハ其ノ效力ヲ生セス

第十五條 滿鮮拓植株式會社ハ興農部大臣ノ許可ヲ受クルニ非サレハ土地若ハ土地ノ上

ニ存スル權利ヲ擔保ニ供シ又ハ移住者以外ノ者ニ讓渡スルコトヲ得ス

第十六條 興農部大臣ハ滿鮮拓植株式會社ノ決議カ法令若ハ定款ニ違反シ又ハ公益ヲ害スルモノト認ムルトキハ之ヲ取消スコトヲ得

興農部大臣ハ滿鮮拓植株式會社ノ理事長、理事又ハ監事ノ行爲カ法令、定款若ハ本法

ニ依ル命令ニ違反又ハ公益ヲ害スルモノト認ムルトキハ之ヲ解任スルコトヲ得

第十七條 滿鮮拓植株式會社ハ法定ノ積立金ヲ爲スコトヲ要セス

第十八條 滿鮮拓植株式會社ニ對シテハ營業稅、登録稅及契稅ハ免除ス

第五、滿鮮拓植株式會社定款

第一章 總 則

第一條 本會社ハ康德三年勅令第九十七號ニ依リ設立セル株式會社ニシテ滿鮮拓植株式會社ト稱ス

第二條 本會社ハ左ノ業務ヲ營ムヲ目的トス

一 移住者ノ爲必要ナル土地ノ取得經營及處分

二 移住者ノ爲必要ナル施設ノ經營

三 移住者ノ爲必要ナル資金ノ貸付

四 前各號ニ附帶スル事業

第三條 本會社ノ資本ノ額ハ一千五百萬圓トス但シ興農部大臣ノ認可ヲ受ケ之ヲ增加スルコトアルヘシ

第四條 本會社ハ本店ヲ新京ニ置キ支店ヲ新京、奉天、延吉、牡丹江ニ設置ス

本會社ハ前項ノ支店ノ外必要ノ地ニ支店又ハ出張所ヲ設置スルコトアルヘシ

第五條 本會社ノ存立期間ハ設立登記ノ日ヨリ三十年トス但シ興農部大臣ノ認可ヲ受ケ之ヲ延長スルコトアルヘシ

第六條 本會社ノ公告ハ政府公報及新聞紙ヲ以テ之ヲ爲ス但シ公告スヘキ新聞紙ハ理事長之ヲ選定シ政府公報ヲ以テ公告スヘシ

第二章 株 式

第七條 本會社ノ資本ハ之ヲ三十萬株ニ分チ一株ノ金額ヲ五十圓トス

株式ハ總テ記名式トシ株券ハ一株券十株券百株券千株券及一萬株券ノ五種トス

第八條 本會社ノ株金第一回ノ拂込額ハ一株ニ二十五圓トシ第二回以後ノ拂込ノ期日方
法及金額ハ役員會ノ決議ヲ以テ之ヲ定ム

第九條 株主株金ノ拂込ヲ怠リタルトキハ其ノ拂込期日ノ翌日ヨリ現拂込日迄滯納金ニ
對シ百圓ニ付一日四分ノ割合ニ當ル延滯利息ヲ徴スヘシ

第十條 本會社ノ株式ハ會社ノ同意ヲ得ルニ非サレハ之ヲ他人ニ讓渡スルコトヲ得ス

第十一條 株式ノ名義書換ヲ爲サントスルトキハ本會社所定ノ名義書換請求書ニ株券ヲ
添ヘ之ヲ本會社ニ提出スヘシ但シ本會社ニ於テ必要ト認ムルトキハ該株券ノ取得ヲ證
明スヘキ書類ノ提出ヲ求ムルコトアルヘシ

第十二條 株券ノ喪失ニ因リ株券ノ再交付ヲ求ムル株主ハ本會社ノ適當ト認ムル二人以
上ノ保證人ノ連署シタル所定ノ請求書ヲ本會社ニ提出スヘシ

前項ノ請求アリタルトキハ本會社ハ請求株主ノ費用ヲ以テ引續キ三日以上其ノ旨ヲ公
告シ最終ノ日ヨリ三十日以内ニ株券ヲ發見セス且異議ヲ申出ツル者ナキトキニ限り新
株券ヲ請求株主ニ交付スルモノトス

第十三條 株券ノ毀損汚損又ハ種類變更ノ爲新ニ株券ノ交付ヲ受ケントスル株主ハ本會

社所定ノ請求書ニ株券ヲ添ヘ之ヲ本會社ニ提出スヘシ

毀損又ハ汚損ノ爲株券再交付ノ請求アリタルトキハ本會社ハ其ノ株券ヲ審査シ真正ナ
ルコトヲ鑑別シ難キ場合ニ於テハ喪失ノ例ニ依ル

第十四條 本會社ハ株券ノ名義書換ノ場合ニ在リテハ株券一枚ニ付一角新株券交付ノ場
合ニ在リテハ株券一枚ニ付三角ノ手数料ヲ請求株主ヨリ徴スヘシ

第十五條 本會社ハ定時株主總會前三十日以内株券ノ名義書換ヲ停止ス但シ此ノ場合ニ
於テハ豫メ其ノ旨ヲ公告スヘシ

臨時株主總會ノ場合ニハ前項ノ規定ヲ準用スルコトヲ得

第十六條 株主又ハ其ノ法定代理人ハ所定ノ書式ニ依リ其ノ氏名住所及印鑑ヲ本會社ニ
届出ツヘシ其ノ變更アリタル場合亦同シ

法定代理人前項ノ届出ヲ爲ストキハ其ノ資格ヲ證スヘキ書面ヲ添附スヘシ

第三章 株 主 總 會

第十七條 株主總會ハ定時及臨時ノ二種トシ定時株主總會ハ毎年決算期日後三十日以内
ニ之ヲ招集シ臨時株主總會ハ必要ノ都度之ヲ招集ス

第十八條 株主總會ノ議長ハ理事長之ニ當ル理事長事故アルトキハ理事ノ一人其ノ職務ヲ行フ

第十九條 本會社ノ株主ハ一株ニ付一個ノ議決權ヲ有スルモノトス

第二十條 株主ハ本會社ノ株主ヲ以テ代理人トスルニ非サレハ代理ニ依リ議決權ヲ行使スルコトヲ得ス

前項ノ代理人ハ其ノ代理權ヲ證明スヘキ委任狀ヲ本會社ニ提出スヘシ

第二十一條 株主總會ノ決議ハ法令ニ別段ノ定アル場合ヲ除クノ外出席株主ノ議決權ノ過半數ヲ以テ之ヲ爲ス可同數ナルトキハ議長ノ決スル所ニ依ル

第二十二條 株主總會ニ於テ決議シタル事項ハ之ヲ決議録ニ記載シ議長及出席株主二人以上之ニ記名捺印スヘシ

第四章 役 員

第二十三條 本會社ニ理事長一人理事五人以内及監事三人以内ヲ置ク

理事長ハ政府ノ任命ニ依リ就任ス理事及監事ハ株主總會ニ於テ株主中ヨリ之ヲ選舉シ其ノ就任ハ興農部大臣ノ認可ヲ受クルモノトス

第二十四條 理事長ハ本會社ヲ代表シ其ノ業務ヲ綜理ス

理事長事故アルトキハ理事ノ一人其ノ職務ヲ行フ

理事ハ理事長ヲ輔佐シ本會社ノ業務ヲ分掌ス

監事ハ本會社ノ業務ヲ監査ス

第二十五條 理事長ノ任期ハ五年理事ノ任期ハ四年監事ノ任期ハ二年トス

第二十六條 理事長及理事ハ興農部大臣ノ許可ヲ受クルニ非サレハ他ノ業務ニ從事スルコトヲ得ス

第二十七條 役員ノ受クヘキ報酬及手當ハ興農部大臣ノ認可ヲ受クルモノトス

第二十八條 役員會ハ理事長及理事ヲ以テ組織シ重要ナル業務ヲ議決ス

役員會ハ理事長之ヲ招集シ會員ノ半數以上出席スルニ非サレハ之ヲ開クコトヲ得ス但シ已ムヲ得サル事故アリテ定數ニ滿タサルモ其ノ事ノ急施ヲ要スルトキハ出席員ニ於テ之ヲ決議シ次ノ役員會ニ其ノ旨ヲ報告スヘシ

議事ハ多數ヲ以テ之ヲ決ス可同數ナルトキハ理事長之ヲ決ス

第五章 計 算

第二十九條 本會社ノ營業年度ハ毎年一月一日ニ始マリ十二月三十一日ニ終ルモノトス
第三十條 理事長ハ營業年度毎ニ財産目錄、貸借對照表、營業報告書、損益計算書及損益處分ニ關スル議案ヲ作成シ監事ノ意見ヲ添ヘ定時株主總會ニ提出シテ其ノ承認ヲ受クヘシ

第三十一條 本會社ハ當該年度總收入金ヨリ同年度總支出金ヲ控除シタル殘額ヲ利益金トシ興農部大臣ノ認可ヲ受ケ左ノ通之ヲ處分ス

- 一 役員 賞與 金 利益金ノ百分ノ一〇以内
- 二 社員退職慰勞準備金 若干
- 三 株主 配當 金 若干

第三十二條 利益金ノ配當ハ每營業年度末現在ノ株主ニ之ヲ拂渡スルモノトス

第六、朝鮮移住協會會則

第一章 名稱及事務所

第一條 本會ハ朝鮮移住協會ト稱ス

第二條 本會ハ事務所ヲ京城府光化門通一番地朝鮮總督府内ニ置ク

本會ハ必要ノ地ニ支部ヲ置ク

第二章 目的及事業

第三條 本會ハ開拓民事業ノ援助ニ關スル施設ヲ行フヲ以テ目的トス

第四條 本會ハ前條ノ目的ヲ達スル爲左ノ事業ヲ行フ

- 一 開拓民事業ノ周知徹底
- 二 開拓民事業ニ關スル調査及研究
- 三 開拓民ノ訓練
- 四 開拓民移住ノ斡旋及後援
- 五 開拓ニ關シ功勞アル者ノ表彰
- 六 前各號ノ外本會ノ目的ヲ達スルニ必要ナル施設

第三章 役員

第五條 本會ニ左ノ役員ヲ置ク

會長

副 會 長 一名

理 事 若干名

第六條 役員ハ名譽職トス

第七條 會長ハ本會ヲ總理ス

第八條 副會長ハ會長ヲ補佐シ會長事故アルトキハ其ノ職務ヲ代理ス

第九條 理事中常務理事一名ヲ置キ會長之ヲ選任ス

常務理事ハ本會ノ常務ヲ掌理ス

第十條 會長及副會長ハ理事會ニ於テ之ヲ推舉ス

第十一條 理事ハ會長之ヲ委囑ス

第十二條 會長及副會長ノ任期ハ五年トシ其他ノ役員ノ任期ハ四年トス但シ重任ヲ妨ゲズ

補缺役員ノ任期ハ前任者ノ殘任期間トス

第十三條 役員ハ任期滿了後ト雖モ其ノ後任者ノ就職スル迄其ノ職務ヲ行フモノトス

第四章 會 議

第十四條 理事會ハ會長、副會長及理事ヲ以テ之ヲ組織シ必要ニ應ジ會長之ヲ招集シ左ノ事項ヲ議決ス

一 會則ノ變更ニ關スル事項

二 事業計畫及收支豫算ニ關スル事項

三 財産ノ管理及處分ニ關スル事項

四 本會ノ解散

五 其ノ他會長ニ於テ必要ト認メタル事項

第十五條 會長ハ理事會ノ議長ト爲ル會長及副會長共ニ事故アルトキハ常務理事議長ト爲ル

第十六條 理事會ノ議事ハ出席者ノ過半數ヲ以テ之ヲ決ス可否同數ナルトキハ議長ノ決スル所ニ依ル

第十七條 會長ニ於テ必要アリト認ムルトキハ書面ヲ以テ理事會ヲ組織スルモノノ意見ヲ聽キ理事會ノ議決ニ代フルコトヲ得
前條ノ規定ハ前項ノ場合ニ之ヲ準用ス

第五章 資産及會計

第十八條 本會ノ資産ハ左ノ各號ニ掲グルモノヨリ成ル

一 補助金及有志者ノ寄附ニ係ル金錢其ノ他ノ物件

二 本會ノ事業又ハ資産ヨリ生ズル收入其ノ他雜收入

第十九條 本會ノ資産ヲ分チテ基本財産及普通財産トス

第二十條 左ノ各號ニ掲グルモノヲ本會ノ基本財産トス

一 理事會ノ議決ニ依リ基本財産ニ組入レタルモノ

二 基本財産トシテ指定寄附ヲ受ケタル金錢其ノ他ノ物件

第二十一條 基本財産ハ之ヲ消費スルコトヲ得ズ但シ特別ノ事情アル場合ニ於テ理事會ノ議決ヲ經タルトキハ此ノ限ニ在ラズ

第二十二條 本會ハ第四條ノ事業ヲ行フ爲テニ資金ノ必要アル場合ハ償還方法ノ確實ナル場合ニ限り理事會ノ議決ヲ經テ之ガ借入ヲ爲スコトヲ得

第二十三條 本會ノ經費ハ左ノ諸收入ヲ以テ之ニ充ツ

一 基本財産ヨリ生ズル收入

二 補助金寄附金其ノ他ノ收入

第二十四條 本會ノ會計年度ハ毎年四月一日ニ始リ翌年三月三十一日ニ終ル

第二十五條 本會ノ豫算ハ會計年度開始前一月前ニ之ヲ調製シ決算ハ會計年度經過後二月以内ニ之ヲ完了シ決算報告書ヲ作成スルモノトス

第二十六條 毎會計年度ノ剩餘金ハ之ヲ翌年度ノ經費ニ充テ又ハ理事會ノ議決ヲ經テ基本財産ニ編入ス

第二十七條 毎會計年度ノ決算ハ理事會ニ之ヲ報告スルモノトス

補 則

第二十八條 會則ハ理事會ヲ組織スル者ノ定數ノ三分ノ二以上ノ同意ヲ得ルニ非ザレバ之ヲ變更スルコトヲ得ズ

第二十九條 本會ハ理事會ヲ組織スル者ノ定數ノ三分ノ二以上ノ同意ヲ得テ解散スルコトヲ得

本會解散シタル場合ニ於ケル財産ノ處分方法ハ理事會ニ於テ之ヲ決定ス

第三十條 本會則ノ施行ニ關シ必要ナル細則ハ理事會ノ議決ヲ經テ之ヲ定ム

第三十一條 本會設立當時ノ役員左ノ如シ

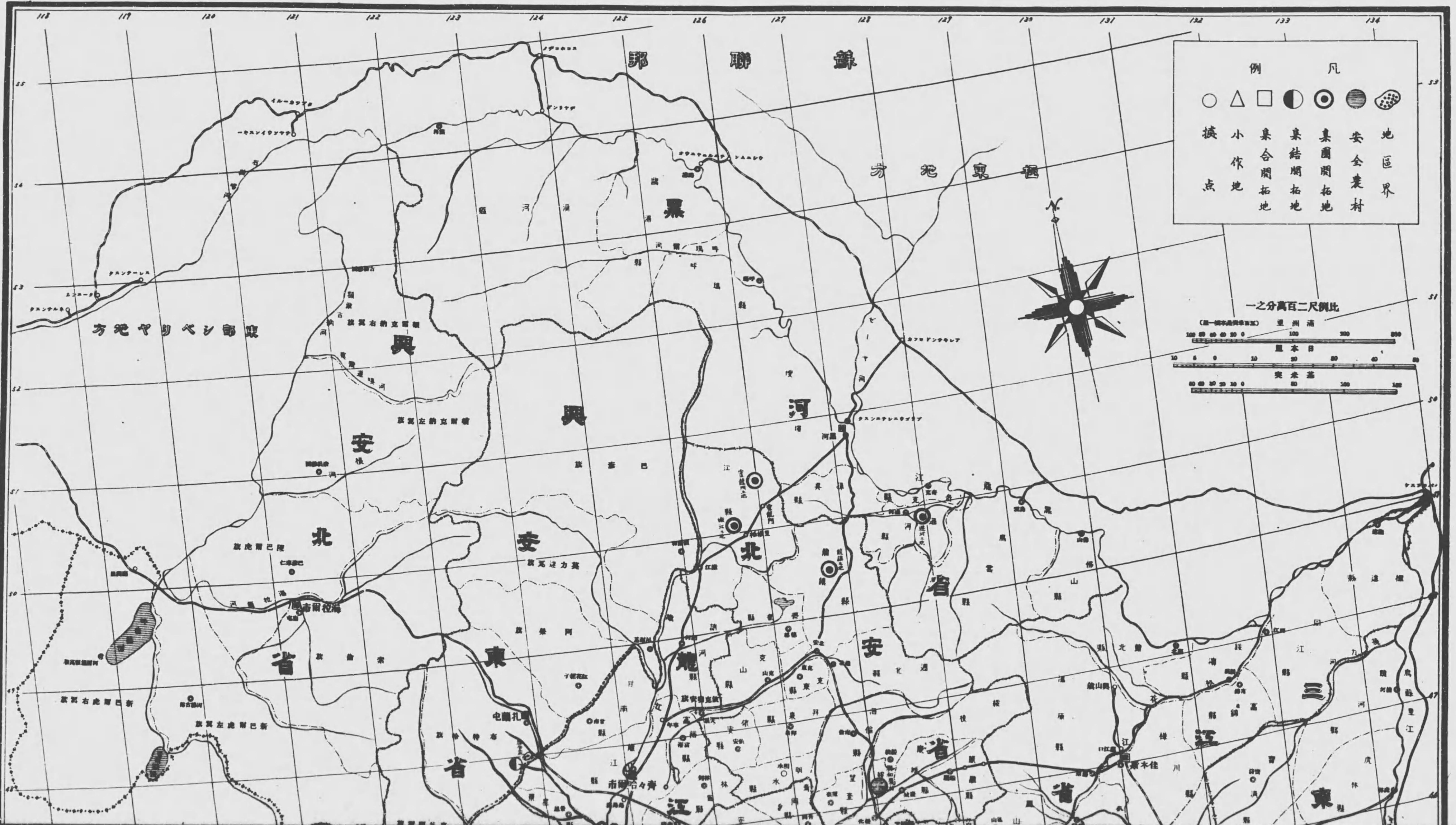
會 長	副 會 長	常 務 理 事	理 事	理 事	理 事	理 事
諏 訪 務 長	金 季 洙	辻 桂 五	渡 邊 日 子	韓 相 龍	岸 勇 一	尹 相 曦

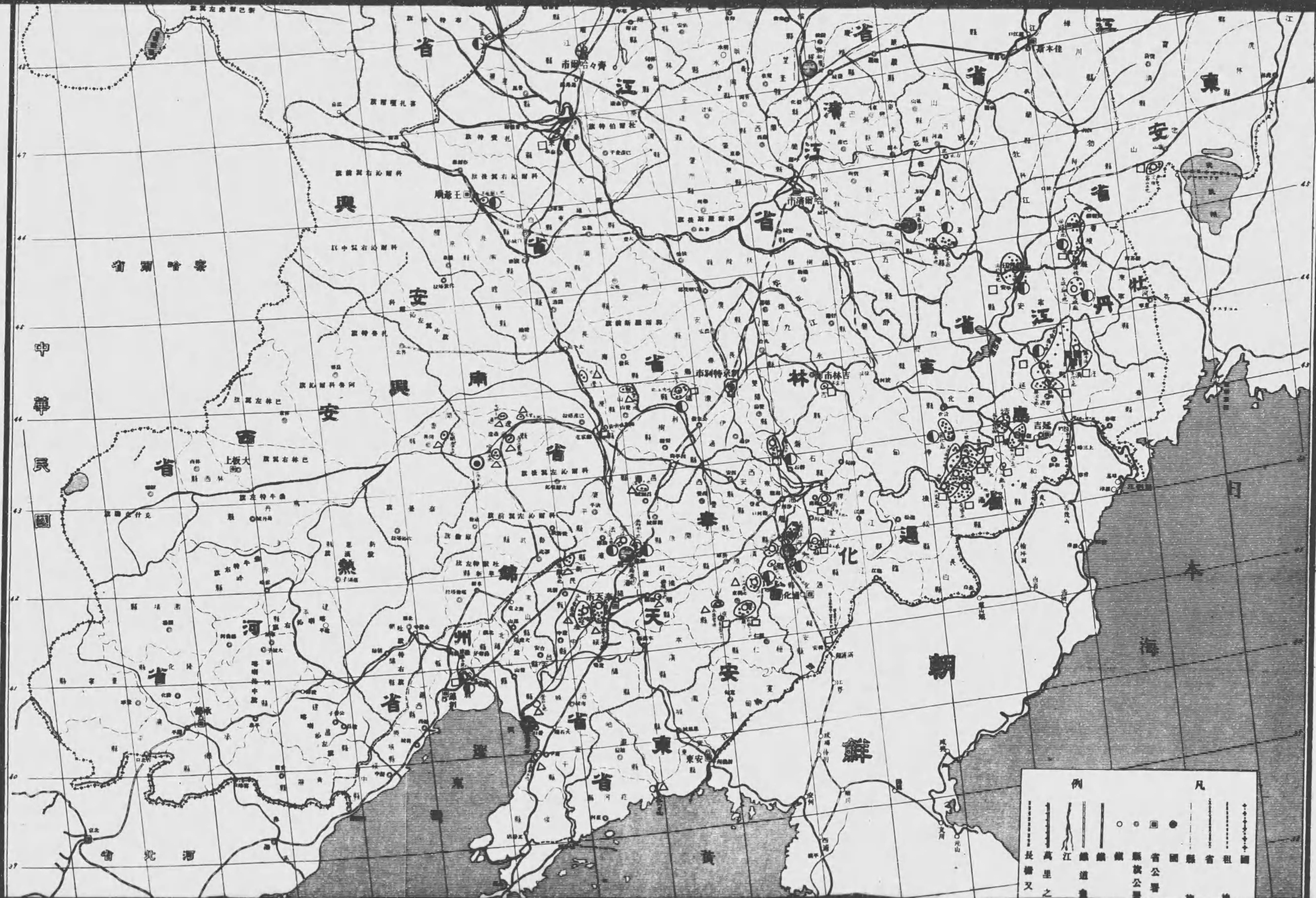
第七、朝鮮人開拓民滿洲入植地圖



圖

滿洲國開拓農植地地圖

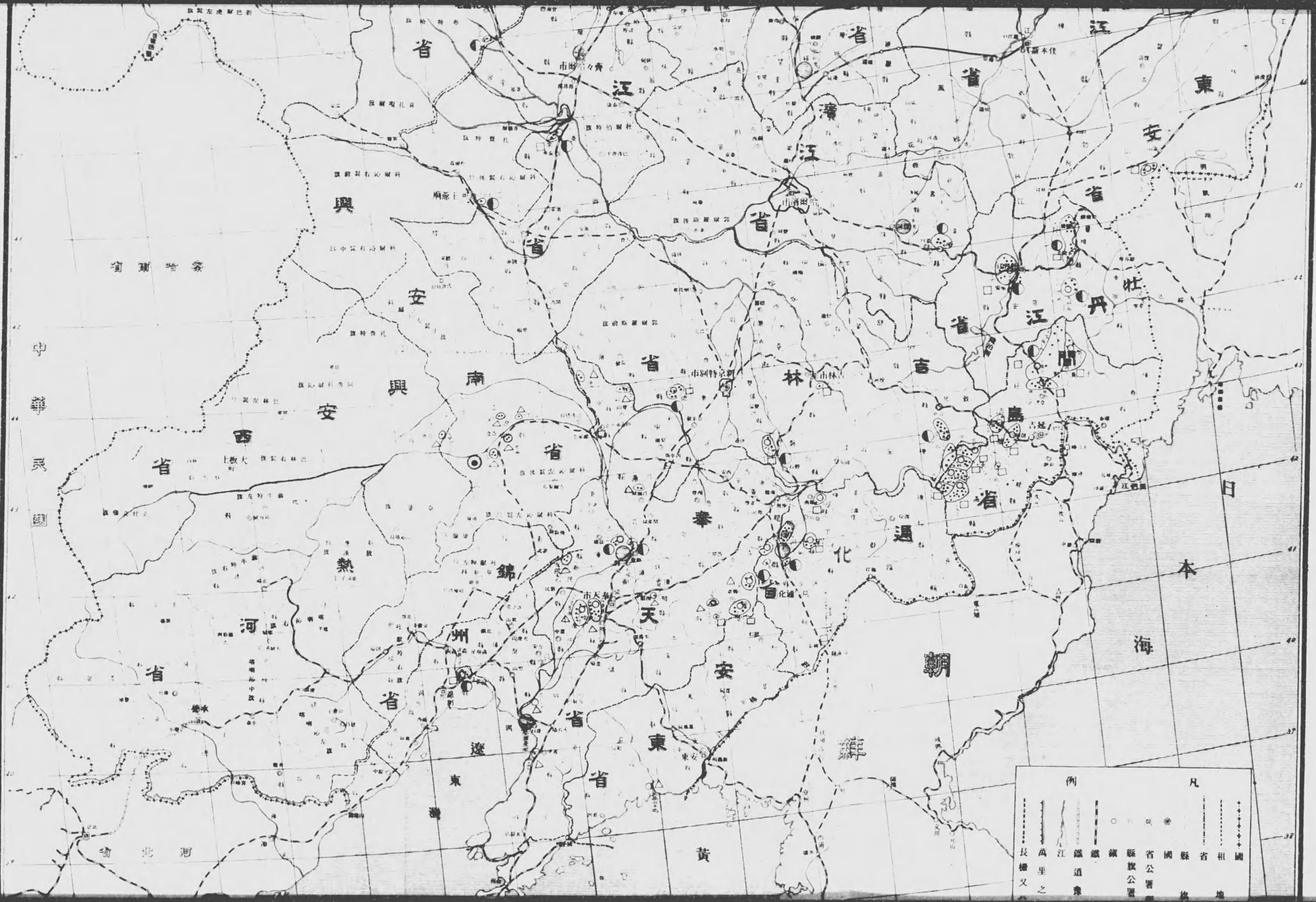




中華民國

例 凡

長萬里之	江鐵道	鐵路	省公署	縣公署	省城	縣城	國界



中華民國

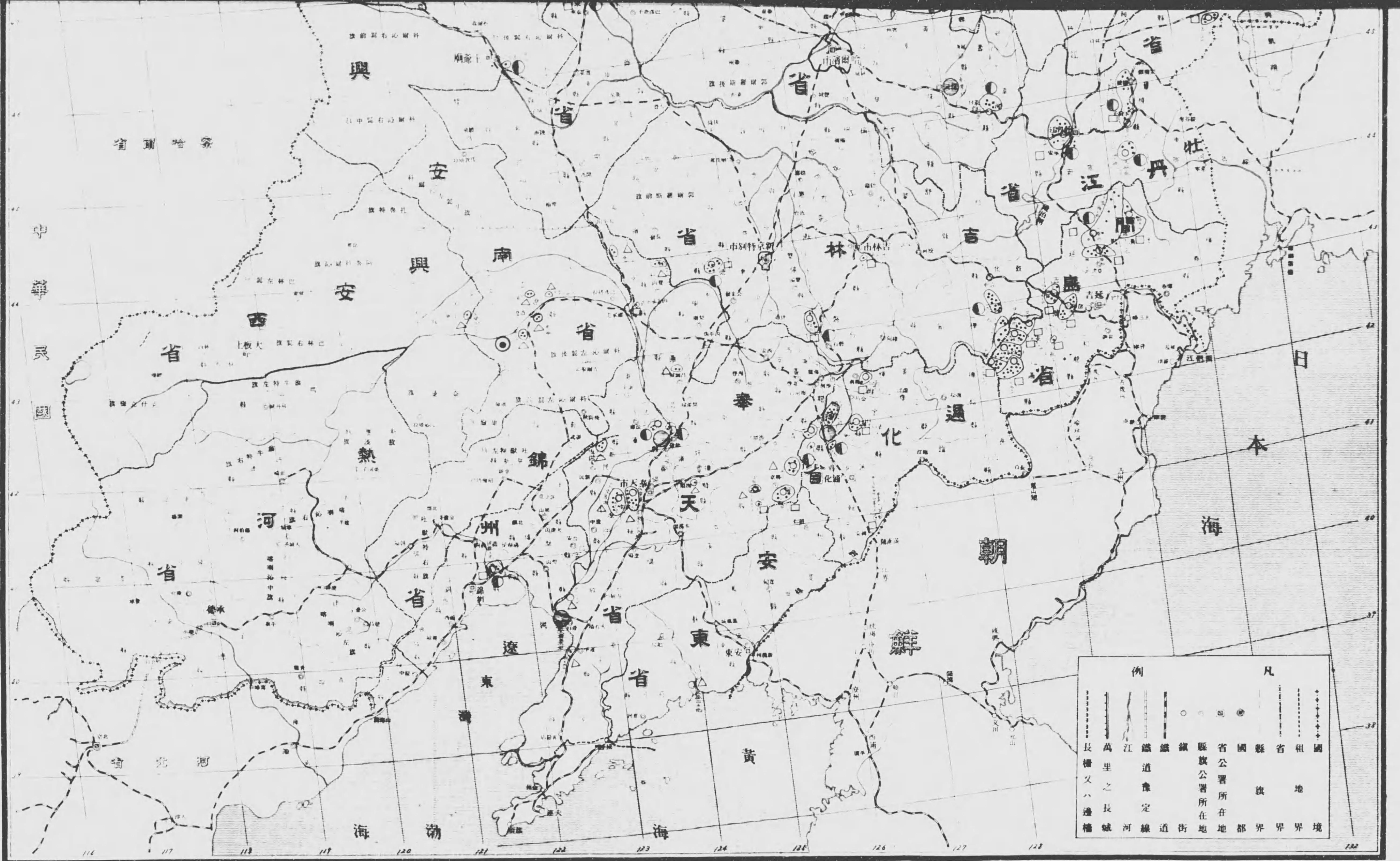
例	凡
長標又	國
江	省
鐵道	縣
鐵	公署
縣公署	國
省公署	省
國	租
省	地



例	凡
長欄又八造	國界
補	省界
萬里之長	縣界
江	旗
鐵道	省公署所在地
鐵道	縣公署所在地
定	部界
街	界
地	界
	境

社會式株植拓鮮滿

月五(年六十和昭)年八德康



滿鮮拓植株式會社

康德八年(昭和十六年)五月

康德八(昭和十六)年六月二十五日印刷
康德八(昭和十六)年六月三十日發行

【非賣品】

新京特別市興安胡同白山住宅三七一號

編纂人 高 見 成

大連市東公園町三一

印刷所 滿洲日日新聞社印刷所

新京特別市興仁大路四〇七號

發行所 滿鮮拓植株式會社



